



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	多様な若者の学びを保障する高校教育：北星学園余市高等学校調査の中間報告
Author(s)	伊藤，健治；横関，理恵；高嶋，真之 他
Citation	公教育システム研究，13，55-98
Issue Date	2014-08-18
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56776
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA11562857_13_55-98.pdf



多様な若者の学びを保障する高校教育

—北星学園余市高等学校調査の中間報告—

伊藤健治・横関理恵・高嶋真之・宮井真由・村松憲治
近藤なつみ・謝苗子・富浦麻穂・小林大造

— 目 次 —

序章：本調査の課題と概要	伊藤健治
第1章：北星余市高校の概要について	伊藤健治・高嶋真之
1. 学校概要と教育方針	
2. 余市高校の特徴	
3. 北星余市高校のこれまでの歩み	
第2章：生徒から見た北星余市高校	伊藤健治・高嶋真之・近藤なつみ
1. はじめに	謝苗子・富浦麻穂・小林大造
2. 生徒インタビュー調査から	
(1) インタビュー対象者の概要	
(2) 学校行事・生徒会	
(3) 授業	
(4) 進路指導	
(5) 生活指導・校則	
(6) 放課後の生活と下宿・寮	
3. 北星余市高校における学びに関する考察	
第3章：教員から見える北星余市高校	横関理恵・宮井真由・村松憲治
1. はじめに	
2. 教員のインタビュー調査から	
(1) 教員A氏のインタビューから	
(2) 教員B氏のインタビューから	
(3) 教員C氏のインタビューから	
3. 北星余市高校の教育と課題に関する考察	
終章：北星余市高校の実践から考察する高校教育における学び	伊藤健治

キーワード：私立学校、高校教育、高校中退、不登校

序章 本調査の課題と概要

(担当：伊藤健治)

1. 調査の経緯

現代の公教育制度における課題の1つに、若者の移行過程の変容に関する問題がある。私たち北大教育行政学研究グループでは、この数年間、特に不登校や高校中退に焦点を当て、教育委員会の取り組みやフリースクールの活動に関する実態調査、高校中退経験者へのインタビュー調査などを行ってきた。本稿の調査は、こうした一連の調査研究の1つとして実施したものである。今回、私たちが北星学園余市高等学校（以下、北星余市高校）に着目した背景には、高校中退経験者へのインタビュー調査の中で、北星余市高校の卒業生数名が、「北星余市高校は普通の高校とは違う」と印象的に語っていたことがある。

北星余市高校に通う生徒は、それまでの学校生活において高校中退や不登校、そして、それらの要因となるような様々なネガティブな学校経験を抱えた者が大多数であって、彼／彼女らは自尊感情や自己肯定感を十分に持つことができない状態で入学してくる。そうした様々な困難を抱えた生徒たちにとって、「普通の学校とは違う」と極めて肯定的に評価される北星余市高校の教育実践とはどのようなものであろうか。そこに北星余市高校だからこそ可能となっている学びがあるとすれば、それは現代の高校教育が抱える課題の現れであり、公教育制度を捉え直す上で重要な視点を提示するものであると考えた。

以上の経緯から、本調査では、北星余市高校の教育実践を通して、現代の若者が必要とする学びのあり方や高校教育制度の課題について考察することを目的とした。

2. 本調査の課題設定

近年、若者の失業率上昇や非正規就労の増加など雇用の不安定化が進む一方で、画一的で学力的に階層化された学校システムによって困難を抱えた若者たちが早期離学に至るなど、高校教育における学びの保障や学校から社会への移行が大きな課題となっている。

これまで早期離学に関する先行研究では、高校中退の要因に関する議論を中心に展開されてきた。例えば、高校中退者がいわゆる底辺校に集中している現状について、清田・黒崎（2001）は「高校教育の序列的構造という制度要因」と捉えているが、高校教員として長年の経験を持つ青砥（2008）は、高校中退の最大の原因は家族の貧困であると主張している。それは、単に所得の貧困だけではなく、低学力、学習意欲の欠如、基本的な生活習慣の訓練の欠如、人間関係の未成熟、アディクション、親からのDV・ネグレクト、貧困層の囲い込み政策（学区撤廃と選択制）を列举して、これらが複合的に作用することで高校中退が生じているとしている。

一方で、高校中退後の進路形成については、内閣府が2010・11年に「高等学校中途退学経験者の意識に関する調査」を行っている。この調査に参加した乾（2014）は、中退後は多くの者がアルバイト就労という不安定な状態にあること、求められる支援として高校卒業資格への要求が高いことなどを指摘する。その一方で、多くの若者が就労における異年齢集団での関わりを通して成長体験を得られているのに対して、高校に戻った者の多くが「進路や生活について相談できる人」がいないと回答するなど、自尊感情が十分に育まれていないことを指摘している。

以上の研究からもわかるように、高校中退は様々な困難が複合的に影響して生じている問題であり、その後の進路形成では高校卒業資格の取得が重要な課題となるにもかかわらず、彼／彼女らの自尊感情は、単に高卒資格を取得するだけでは回復しないのである。この背景には、高校中退経験者が学び直しをする際に、高卒認定試験やスクーリング機会が少ない通信制高校によって高卒資格の取得を目指すケースが多いことが影響していると考えられる。つまり、高

校卒業資格を持たないことは、大学等への進学を困難にするだけでなく、安定的な就労を得るためにも不利をもたらすものであるが、高校における学びとは、高卒資格の取得だけを目的とするものではない。特に、様々な困難を抱える若者にとっての高校教育の役割とは、狭義の学力保障だけではなく、社会への移行過程において不可欠な成長をもたらすような経験を保障することが必要なのではないかと考えられる。

以上のような問題意識を背景として、本稿では、高校をドロップアウトした生徒たちを転編入制度によって積極的に受け入れ、長年に渡って独自の教育実践を展開してきた北星余市高校の実態を明らかにすることによって、様々な困難を抱えた若者たちにとっての高校教育の意義を探っていくことを課題とする。また、この課題を明らかにすることは、現代公教育制度が抱える課題と高校教育が持つ可能性について考察していくことでもある。

3. 本調査の方法と概要

調査の経過は以下のとおりであり、2013年5月から8月にかけて計5回の訪問調査を中心に実施した。なお、本調査は、北星余市高校の全体像を把握することを目的としたため、それぞれのインタビューにおいて広範囲な質問項目を設定して聞き取りを行った。本調査は翌年度も継続して実施する予定であるが、本稿は中間報告として、生徒と教員へのインタビューから得られた限られた情報をもとに、北星余市高校の教育的意義についての仮説的な考察を行っていく。

【調査の経過】

①学校長インタビュー（5月27日）

- ・北星余市高校の概要・沿革、生徒の状況、特色ある教育実践、学校運営等について

②授業見学（6月14日）

- ・学校施設と授業を見学した後、生徒の様子や授業実践等に関して学校長への質疑

③生徒インタビュー（6月24日、7月16日）

- ・個別の半構造化インタビュー（1時間半程度）により、3年生7名に対して、家族や学校経験、入学の経緯、進路の希望、授業・学校生活・私生活の状況、学校の特徴、北星余市高校での学び成長など、について聞き取りを行った。

④教員インタビュー（7月30日、8月1日）

- ・個別の半構造化インタビュー（2～3時間程度）により、勤務年数が比較的長く、学校運営の中心的な役割を担っている教員3名を対象として、教育実践と生徒認識、授業・進路指導、課題活動、学校運営・教員関係、などについて聞き取りを行った。

第1章 北星余市高校の概要について

1. 学校概要と教育方針

（担当：伊藤健治）

北星余市高校は、アメリカ人宣教師サラ・クララ・スミス女史の北星学園建学の精神「実生活においてさまざまな義務と責任を全うしうる知識の教授と、宗教的・霊的影響による人格の育成」を受け継ぎ、1965年に開設された全日制普通科のキリスト教主義学校である。同校の所在地である余市町は、北海道の西部、積丹半島の東の付け根に位置する人口約21,000人の町である。余市町は、北海道内でも温暖で気候に恵まれた地域であり、農業や漁業が産業の中心となっている。特に、リンゴ、ブドウ、梨など果樹の栽培が盛んであり、全道一の生産を誇

っている。また、交通アクセスとしては、新千歳空港から JR で約 2 時間 30 分、札幌からは車で 1 時間少々であり、札幌・小樽方面から積丹半島と倶知安方面へ向かう国道の分岐点に当たる交通の要衝に位置している。

北星余市高校では、右のような教育方針が掲げられており、集団を基礎に教育することで、優しさと強さを兼ね備えた人間を育てることに力を注いでいる。こうした教育理念の根底には、「生徒は集団の中でこそ成長する」という人間観と教育観があり、北星余市高校の教育実践はこれらを基盤として展開されていく。

そのため、北星余市高校では、後志地域において教育機会を失った子どもたちの学習保障を使命として創設されて以来、後に札幌及び全道各地からの生徒を受け入れるようになり、1988 年からは転編入制度の導入によって全国の高校中退者を積極的に受け入れてきた。また、近年では全国から多数の不登校経験者が入学しており、現在は高校中退者が全校生徒の約 40%、不登校経験者が全校生徒の 60% 近くに及んでいる。(学校案内パンフレットより)

北星余市高校の教育方針

1. キリスト教の精神にもとづき、教育が行われます。それは、みんなが力を合わせて愛し合い、助け合って生きていくことを共に考えていこうというものです。
2. 明るく、健康な体を鍛え、自然や社会を正しく科学的に判断できる力を養うことを、教科指導を通して追求します。
3. 生徒を集団の中で育て、個人や集団の自主性、自発性、自治能力を育て、高めていきます。
4. 教育活動を支える優れた教師集団づくりを大切にしています。
5. 父母、教師、生徒が一体になった教育を進めていきます。

2. 北星余市高校の特徴

(担当：伊藤健治)

北星余市高校は、長年に渡って高校中退や不登校の経験がある者を積極的に受け入れ、独自の教育実践を展開してきた学校である。多くの中退経験者を受け入れていることから、生徒の年齢は様々であり、少数ではあるが 20 代で入学する生徒もいる。そして、多くの生徒が親元を離れて下宿・寮で生活を送っており、7 割近くが北海道外からの入学者である。本節では、学校長インタビューと学校概要資料をもとに北星余市高校の特徴について述べる。

学校の特色としては、服装が自由であり、授業や生活指導など学校生活の全般を通じて自由な雰囲気がある。生徒層としては、非行経験があるような所謂「ヤンチャ」な生徒と、中学校で不登校だった「おとなしい」生徒が半々であるが、そうした異なるタイプの生徒が、3 年間の学校生活を通して、個性を認め合いながら集団としてまとまっていくことが北星余市高校の特徴である。卒業後の進路は、約 75% が大学・短大・専門学校への進学である。

北星余市高校に転編入してくる生徒たちは、様々な理由によって学校生活に適應することができなかった経験を有している。不登校や高校中退の背景も様々であり、複雑な家庭環境の影響や、教員や友人との人間関係のもつれが要因となっている場合もある。また、非行経験がある者や進学校で学業不振となった者、いじめを受けた経験がある者、発達障害を抱えている者など、実に多様な生徒たちが同じ教室で学んでいる。

生徒の家庭背景では、25% がひとり親家庭であること、各種奨学金の利用が多いこと、就学支援金を 2 倍受け取る世帯(年収 250 万未満程度)や生徒本人が生活保護を受給している者がいるなど、経済的に困難を抱えた家庭も少なくない。しかしながら、大学や専門学校等への進学者が多いことや授業料等の他に寮・下宿費用として月 7 万円程度の費用が必要となることから考えると比較的安定した家庭も多く、経済状況としても多様であることがわかる。ただし、家庭背景が多様であるといっても、一般的に中退経験者が高卒資格を取る場合には高卒認定試

験や通信制高校を利用するケースが多くなっている中、親元を離れて費用負担も比較的大きい北星余市高校に通わせていることを考えると、保護者の教育に対する意識は高く、北星余市高校の教育実践に何らかの期待を持って入学させていると言えるだろう。この点については、本稿では考察の主な対象とはしていないが、今回の調査を通して、全国に広がる保護者会の存在、行事への積極的な参加、良好な親子関係（学校生活を通しての改善）、などとして確認することができた。

3. 北星余市高校のこれまでの歩み

(担当：高嶋真之)

(1) はじめに

本節では、後の章で現在の北星余市高校の教師・生徒について論じるにあたって、北星余市高校という学校がどのような経緯で現在に至ったのかを概観する。そこで、北星余市高校の歴史を、1965年からの第Ⅰ期、1977年からの第Ⅱ期、1988年からの第Ⅲ期に大別し¹、それぞれの時代の学校・生徒の様子や、そこで行われてきた教育実践の特徴を簡単に論じ、これらを踏まえた上で、現在の北星余市高校が置かれている状況を述べる。

なお、ここでの記述は、北星余市高校の10年史、20年史、30年史にあたる『新しい学園づくりをめざして ある私立高校10年のあゆみ』（1975年）、『北の大地に灯かかげて 北星余市高校の20年』（1987年）、『学校の挑戦 高校中退・不登校生を全国から受け入れたこの10年』（1997年）の3冊に多くを負っており、適宜これら以外の本も参考にした。また、現在の北星余市高校の様子に関しては、生徒・教員インタビューに際して事前に安河内校長に行ったインタビュー（実施日：2013年5月27日）に基づいている。

(2) 第Ⅰ期（1965年～1976年）

1960年代前半は、戦後ベビーブーム期に生まれた、いわゆる団塊の世代が高校へと入学する時期であり、余市町でも高校入学者数の増加への対応が迫られていた。このような背景があり、余市町からの強い要望を受けて1965年に誕生したのが、北星学園余市高等学校である。それまで地元の高校の数の少なさから、近隣の小樽市や札幌市の高校に入学することを余儀なくされていた余市町近隣の生徒を、北星余市高校は受け入れることになった。けれども、その存続は、開校前から北星学園内部でも危ぶまれていた。実際、北星余市高校は近隣の公立高校の滑り止めという位置付けであったため、入学希望者数は定員よりも少なく、教員は中学校や家庭を訪問して入学を勧めたり、面接試験を入学式の直前まで実施したりしていた。

このような教員の懸命の努力が実り、定員を超える入学者が集まった。しかし、大半の生徒が公立高校の受験に失敗したという負の経験を経て北星余市高校に進学してきていた。生徒の荒れはひどく、授業の崩壊、飲酒・喫煙、盗難、暴力などの校内事件が頻発するようになった。これに対処するため、例えば、生徒の不満を教師が受け止め、問題解決へと向かう「話し合い運動」が展開され、相互の歩み寄りが模索された。また、開校当初の理想であった生徒の自主的な活動を、クラス集団を土台としたホームルーム活動を中心に展開し、成果を上げるクラスも出始めていた。さらに、年を重ねるごとに生徒会活動やクラブ活動も機能し始め、生徒の自主的な活動は促進された。もちろん、これらだけで荒れが収まるわけではなく教員の苦悩は絶えなかったが、日々起こる様々な問題から、生徒も教員も自分たちの課題を認識し、自分たちの主張をお互いにぶつけ、解決の糸口を見つけ出そうとしていた。

このような生徒と教師の間に芽生えた対話精神と生徒の自主性の二本柱が、北星余市高校の教育実践として根付き始め、少しずつではあるが学校も安定し始める。

¹ 北星学園余市高等学校編（2003：3）を参考にした。

(3) 第Ⅱ期 (1977 年～1987 年)

開校から 10 年以上が経ち、北星余市高校にも少しずつ変化が現れ始める。ここでは、①入学する生徒層の変化、②学校の授業に対する姿勢の変化の 2 つを取り上げる。これらは、この時代の北星余市高校の 1 つの転機を示すと同時に、現在の北星余市高校を巡る問題にも繋がる重要なトピックでもある。

①入学する生徒層の変化

開校から 10 年が経った 1975 年度に、北星余市高校では初めて全学年で定員を超える人数の生徒が集まった。けれども、その 2 年後の 1977 年度に入学者数が定員を下回ってからは、以前のように定員を満たすことが難しくなっていた。その主な理由は 2 つある。1 つは、近隣の公立高校の定員が増え、元々北星余市高校に入学していた生徒層の一部が公立高校へと流れてしまったことである。もう 1 つは、団塊の世代のピークが過ぎ、北星余市高校のある余市町近郊の子どもの絶対数が減少したことである。

北星余市高校はこの生徒の二重の減少を、生徒募集の範囲を地理的に拡大させることで食い止めようとした。そこでターゲットとなったのが、札幌市近郊に住む生徒であった。この戦略により、余市町近郊からの入学者数の減少に反比例して、札幌市近郊からの入学者数は増加した。その生徒たちは、第Ⅰ期と同様に、札幌市にある高校に入学できずに北星余市高校へと進学した者がほとんどであった。

このような生徒層の変化が、1977 年の入学者数の定員割れを皮切りに始まるため、1977 年が第Ⅱ期の始まりとなっている。生徒層は変化したけれども、学校・教師が抱えた問題は第Ⅰ期と変わらなかったため、第Ⅰ期で蓄積された生活指導のノウハウを駆使して、困難な局面に対処していった。

②学校の授業に対する姿勢の変化

その一方で、この時期に北星余市高校は授業づくりにも力を注ぎ始める。

北星余市高校では、開校当初から教科指導の重要性が強調されており、教師がいかにわかりやすく、親しみやすく教えるかを模索していた。けれども、学校全体で取り組まれていた生活指導とは異なり、教科指導は個々の教師に委ねられていたため、学校全体ではもちろん、教科内でも足並みが揃っているとは言えなかった。このような状況が背景にあり、それまで主に生活指導に関する議論が中心だった教師研修会で、授業に関することが議論されるようになった。その始まりは、「現段階で（教育課程の）自主編成に向けての自主教材の到達点」（北星学園余市高等学校編 1987：438（ただし、（ ）内は引用者が補足した））をテーマの 1 つに掲げた 1977 年の第 24 回教師研修会であった。この他にも、授業中の生徒の問題の共有や生徒に対する対応の統一などがなされ、これまで個々で蓄積されていたものが徐々に教科内、学校全体へと広がりを見せていた。

その 1 つの結晶が、北海道大学教育学部教育方法学研究グループとの授業の共同研究の始まりである。教育課程の自主編成をテーマに、1977 年の第 24 回教師研修会に続いて、1978 年の第 26 回教師研修会が開催され、その際に北大教育学部の教育方法学研究グループの鈴木秀一教授を迎えて講演会が行われた。これがきっかけとなり、1978 年から 6 年間、北星余市高校と北大教育学部による、授業についての共同研究が進められることとなった²。先述したように、この時期は生徒層の変化があり、授業も簡単に成立するような状況ではなかったが、この共同研究は、授業についても教師に確かな手ごたえを与え、生活指導と教科指導の両輪が揃うことで、学校の更なる発展の可能性をうかがわせるものであった。

² その詳細はここでは省略するが、この間行われた授業実践の一部は、北星学園余市高等学校編（1984）に詳しい。

このように見ると、第Ⅱ期の北星余市高校は、入学する生徒数の減少と、札幌市近郊の指導が困難な生徒の受け入れのために、依然として不安定な状態であり続けながらも、生活指導と教科指導の核をつくり上げることで、学校を安定させようとしていたことがわかる。

（４）第Ⅲ期（１９８８年～現在）

不登校や高校中退などを経験した生徒を積極的に受け入れるという現在の北星余市高校の原形は、１９８８年の転編入制度の導入に求められる。これが第Ⅲ期の始まりであり、第Ⅱ期までの北星余市高校との間に大きな隔たりをもたらした。

①転編入制度導入前夜

転編入制度が導入される前の北星余市高校は、第Ⅱ期のところで述べたように、生徒の減少への対応に追われていた。しかし、生徒の募集範囲拡大は余市町近郊の生徒数の減少の一部を補填するに留まり、２００名の定員を満たすまでには至らず、徐々に生徒数は廃校の危険水域へと近付いていった。北星余市高校は学校存続のための次なる一手を講じなければならない危機的状況にあった。

一方で、北星余市高校はわずかな人数ではあるが生徒の転入を受け入れていた。以前、北星余市高校に勤めていた教師が、留年や退学に追い込まれた生徒に対して、北星余市高校での再スタートを転勤先で後押ししていたのである。これをヒントに、１９８７年に当時の校長は、「転入生受け入れについて（お願い）」と題する文章を東京都・神奈川県私立高校に送り、関東からの転入生の受け入れを試みた。はじめはあまり効果がなかったが、このことが新聞記事となったことで反響が高まり、全国から問い合わせが殺到する。

これにより、転編入制度導入が現実的となり、学校内では様々な議論がなされた。廃校の危機が間近に迫っており、学校存続のためにはこの手しかなかったことは確かだったが、受験によって公立高校から漏れた生徒をこれまで数多く掬い、育て上げてきた学校・教師の経験の蓄積の自負もあったことから、翌年の１９８８年から転編入制度が導入されることとなった。

②入学する生徒層のさらなる変化

不登校・高校中退という当時の問題に全国的にもいち早く対応することで、北星余市高校は全国各地から生徒を集めることに成功し、廃校の危機を脱することになった。それどころか、１９７５年度に１度だけ達成した、全学年での定員を超える人数の確保も、安定して達成することが可能となった。けれども、この新たな制度の導入は、入学する生徒の更なる変化をもたらした。

第Ⅱ期の変化は、余市町近郊から札幌市近郊へと生徒の受け入れ範囲を拡大するものであり、第Ⅲ期の変化もその延長線上にあると言える。すなわち、余市町近郊から札幌市近郊、そして全国へという生徒募集範囲の地理的拡大である。また、第Ⅱ期で札幌市近郊の生徒数が余市町近郊の生徒数を上回ったのと同様に、転編入制度導入後は徐々に道外出身の生徒の割合が大きくなっていき、現在もその大小関係は変わっていない。この点で言えば、第Ⅲ期においても、北星余市高校が抱える困難に大きな変化はなく、これまで蓄積されてきた教育実践のノウハウが活用できるかのように見える。しかしながらこれらに加えて、第Ⅲ期の変化は、生徒の多様化を促進した。第Ⅱ期までの北星余市高校の生徒は、公立高校に入学することが出来なかった偏差値序列で下位に位置する生徒、というように一括りに語ることもできないわけではなかった。けれども、転編入制度のターゲットは全国の不登校・高校中退経験者であったため、出身地のばらつきにはじまり、不登校・高校中退に起因する学校経験の長短や年齢の違い、学力差など、これまでに見られなかった様々な差異が見られるようになった。

このような変化により、これまで北星余市高校で蓄積されてきた従来の教育実践は、そのままの形では通用しなくなっていった。例えば、不登校経験者、特にいじめが原因で不登校にな

った生徒は、人との関係を上手く築くことができず、北星余市高校の生活指導の核の1つであるクラス集団づくりにより一層の困難をもたらした。また、生徒の学力差は、アルファベット26文字を全て書けない生徒から、進学校を中退した大学受験を目指す生徒までといった形で現れることになり、第Ⅱ期で確立した教科指導の方法も教科によっては変更が余儀なくされた。

このように、転編入制度の導入によって北星余市高校は、これまで抱えてきた教育上の困難を引き継ぎつつも、新たな課題に直面することになったと言える。

③現在の北星余市高校

現在の北星余市高校も、不登校・高校中退経験者を積極的に受け入れることが生徒募集の軸となっているという意味では、第Ⅲ期に含まれていると言える。けれども、転編入制度導入から20年以上が経ち、その当時とは違った様相を呈している。中でも、大きく変わった点が2つある。

1つは、生徒の多様化に複雑な背景が絡んできていることである。例えば、発達障害を抱えている生徒が増えており、特別な配慮が必要である。或いは、貧困や親の病気などが原因で家庭が非常に不安定な状態にあり、その影響を生徒も受けている場合など、1人ひとりの生徒との関わりに今まで以上に神経を研ぎ澄まさねばならなくなった。以前のように、荒れている生徒をただ対処させることとは全く質の異なる状況がある。もう1つは、転編入制度の考え方である。導入当初、転編入制度は学校存続のために生徒を集める最後の手段であったのに対して、現在は全国から生徒を集めることをより積極的に位置付け、多様な生徒で「ごちゃまぜ」³にすることを目的としている。転編入制度の導入後、多様な生徒をそのまま受け止めようとする寛容な生徒理解が教職員の中で共有されるようになっていったのである。

これらが相互に結びつくことによって、転編入制度の導入から始まった、不登校・高校中退経験者の受け入れは、新しい質の教育実践への取り組みを可能にしたのである。

（５）おわりに

「本校の教育も生徒がいなければ存在しえなかった。その点では四十年間は「生徒募集とのたたかい」の歴史であったともいえよう」（北星学園余市高等学校編 2003：3）とあるように、ここで参考にした時期区分は、北星余市高校に入学する生徒数の減少と軌を一にしている。だとすれば、2000年代後半以降、再度入学者数の減少に苦しんでいる現在の北星余市高校は、「第Ⅳ期」に突入したと言えるのかもしれない。入学生徒の地理的拡大が限界にある中で、学校存続の次なる一手を模索しながら、多様で複雑な背景をもつ生徒に正面から向き合い、日々の教育実践を行っているのが、現在の北星余市高校の姿である。

第2章 生徒から見た北星余市高校

1. はじめに

（担当：伊藤健治、高嶋真之）

北星余市高校に通う生徒たちは、その多くが高校中退や不登校などの経験をしており、それまでの学校生活に対してネガティブな感情を抱いて入学・転編入してくる。しかしながら、彼／彼女らは北星余市高校での生活の中で、仲間たちと出会い、先輩後輩、教員や下宿・寮の人たちなど様々な人間関係を通して成長し、卒業時には高校生活をやり遂げた大きな達成感を抱いて卒業していく。こうした特徴は、北星余市に関する様々な調査報告書や出版物、卒業生の語りなどからも示されてきたものである。

本章では、北星余市高校における生活と学びの実態について、在校生の視点から把握するこ

³ 安河内校長へのインタビュー（実施日：2013年5月27日）による。

とを目的として、7名の生徒に対して行ったインタビューをもとに、生徒たちが北星余市での3年間をどのように過ごし、どのような点に学びや成長を感じ取っているのか、また、それがどのような教育実践によって可能になっているのか、について考察する。

（１）北星余市高校に通う生徒の特徴

北星余市高校には全国から多くの高校中退者や不登校経験が入学している。生徒の状況としては、男女比は1:0.4と男子生徒が多く、出身地域別では約7割が道外からの入学者で、道内でも札幌出身者が1割強を占めており、余市や小樽など後志管内が約1割、その他の道内が1割足らずとなっている（2012.5.1時点）。遠隔地からの入学者が多いため、全校生徒の約85%が余市町内にある学校指定の下宿・寮で生活をしている。そのため、数名から30名程度まで様々な規模の下宿・寮が23軒ほどあり、そのすべてが余市町の住民によって営まれている。下宿・寮での共同的な生活は、北星余市高校の1つの特徴となっており、そこでの先輩後輩関係が成長の契機になったと感じているものも少なくない。

また、全国から北星余市に集まってくる生徒たちは、様々な背景をもって入学してくる。一概に不登校・中退経験者といっても、非行経験がある者や生活が不安定な者、進学校で勉強について行けずに退学した者、スポーツ推薦で入学して怪我で部活が出来なくなった者、発達障害を持っている者など、それぞれの実態は多様である。こうした多様な生徒が集まってくる理由の1つとして全国50カ所で実施している教育相談会があり、北星余市の学校説明に併せて保護者からの個人相談を受けている。北星余市高校で実施した生徒へのアンケートによると、4割ほどの生徒が保護者の勧めによって入学したと答えているが、この教育相談会の影響が大きいと考えられる。また、教育相談会を行っている教員たちは、様々な保護者の悩みや子どもたちが抱える困難な状況を目の当たりにしている。特徴的な点として現れているのは、親自身の不安定な状態と、子どもたちにとって生きにくい社会状況だという。前者については、経済的な問題だけではなく、親のうつなどの健康状態の不安定さ、家族・親戚関係の悪化、地域社会での孤立など、子どもの問題に対して親が支えになることができない状況が見られる。後者については、不登校の子どもたちの居場所や中退者を受け入れる通信制高校などが増える中で、その先の問題として大きな不安を感じている人が多いことが認識されている。北星余市に通う生徒たちは、本人の問題だけでなく、家族や社会状況に関連した様々な困難を背景にもって入学してくることがわかる。

（２）調査の方法と対象

生徒への調査は個別のインタビューにより実施した。質問項目は、出身地や家庭背景などの基本事項、入学の経緯や進路の見通し、学校での授業や生活の様子、下宿・寮などの私生活についてなど、北星余市での高校生活の実態を把握するために幅広く設定した。対象者は3年生の7名で、男女比や出身地、不登校・高校中退経験など、できるだけ多様な生徒に話が聞けるように学校を通して生徒に調査協力を依頼した。そのため、調査対象の代表性には留意が必要であるが、北星余市高校の教育実践を生徒の視点から理解する上で意義のあるデータであると考え。なお、調査方法の概略は以下のとおりである。

【方法】個別面接調査（半構造的インタビュー調査）

【所要時間】1時間半～2時間程度

【日時】2013年6月24日、2013年7月16日

【調査対象者】3年生（7名）

【調査内容】主なインタビュー項目は以下の通り

- ① 導 入：基本的な属性、家族構成、入学方法など。
- ② 入学・進路：入学した経緯、A高校の印象、高校卒業後の進路希望など。
- ③ 授 業：難易度、勉強する意味、勉強への取り組み、授業態度、要望など。
- ④ 学 校 生 活：友人関係、行事、生徒会・部活・ボランティア、生活指導・校則など。
- ⑤ 私 生 活：放課後、下宿生活、親との関係など。

【調査者の構成】教員（1名）、院生（7名）、学生（4名）により、調査対象者1名に対して調査者3名程度聞き取りを実施した。

2. 生徒インタビューについて

（1）インタビュー対象者の概要

（担当：伊藤健治）

次に、インタビュー対象者である3年生7人の概要をみていく。北星余市高校では、同じ学年の中でも年齢が異なる生徒が比較的多いため、対象者の年齢も17歳から20歳と幅がある。出身地域では、余市町内の自宅から通う生徒が1人で、その他の6人は道外出身者であり、下宿・寮で生活をしている。

入学までの生活状況や家庭背景をみていくと、7人中5人がひとり親家庭で育っており、その中には、両親の離婚後に祖母と生活をしていた者や一緒に暮らす母親が病気を患っていた者もいた。また、中学から不登校の者も多く、家にはあまりおらずに友人の家で過ごすことが多かったと話す者も複数いた。その他にも、引きこもり気味の生活、非行経験、親との不仲などを語る者などもおり、調査対象者の全体的な傾向として、経済的に厳しい状況や家庭環境が不安定であったことなどが推察される。

学校経験では、高校中退経験者が3人、その他の4人も中学校で不登校の経験がある。こうした入学前の否定的な学校経験を背景にして、学力的な困難や教員に対する不信感などに関する語りがいくつも聞かれた。なお、高校中退経験者3人のうち、1人は1年次に転入し、2人は2年次から編入している。その他の4人は一般入試で入学している。

以下では、生徒から北星余市高校の状況を理解するために、インタビューで聞くことができた内容を、「学校行事・生徒会」「授業」「進路指導」「生活指導」「放課後の生活、下宿・寮」の5つの項目に分けてみていく。

（2）学校行事・生徒会

（担当：富浦麻穂）

①学校行事の位置づけと特徴

北星余市高校では、学校行事を特に重要な教育機会として位置づけている。なぜなら、同じ場所や時間を過ごし、様々な体験を通して、人と人との関わりの中でこそ、生徒の成長が促されていくと考えるからである。学校行事では、生徒たちが一つの目標に向かって取り組む中で、様々な葛藤を乗り越えて一つになる感動がある。その感動こそが生徒の自信に繋がるのだ、と同校では考えている。そのため、同校では1年を通して様々な行事が開催される。5月に行われる1年生研修をはじめとして、強歩遠足・弁論大会・スポーツ大会・北星祭など、多くの行事が生徒会を中心に行われている。

こうした行事の背景には、北星余市の教育実践の特徴を示した「ごちゃまぜ教育」の考え方があり。同校には、日本全国から経歴も年齢もバラバラの生徒たちが集っている。最初はまともにもなくトラブルも続出するが、この多様性を活かした集団づくりが目指されている。こうした多様性を持つ集団を、ある教員は「アメーバ集団」の形成と表現していたが、「アメーバ集団」とは、固定化していない多様性と柔軟性を持った集団のことを指している。不登校や高校中退といった経験をしてきた生徒の中には、人間関係でのトラブルを経験してきた者も少な

くない。固定化した集団がないということは、集団から外れるという概念をもたないことに繋がる。また、多様な生徒が集まれば自分とは全くタイプの違う人とも接することになる。「分けない・区別しない」「先入観を持たない」という狙いも、「アメーバ集団」の形成には含まれている。

こうした特徴をよく示す例として、1年生研修の「団結の樹」がある。これは、座布団一枚の上に6・7人が乗ってしがみつき合っている人間ピラミッドのようなレクリエーションである。この状態を20分間維持するためには互いの協力が欠かせない。「おとなしい子」や「やんちゃな子」など、一見してタイプの違う生徒たちが声を掛け合い、必死に抱き合っている様子は非常に印象的なものである。しかし、こうした集団的な活動は初めから上手くいくわけではない。教員インタビューによると、毎年、自分の立ち位置がわからずに固まる生徒や暴れ出す生徒がいたり、生徒間で喧嘩が勃発したりするなど、レクリエーションどころではなくなってしまいう状況が生じるという。こうした状況においても、あくまで生徒が主体となって進めていくことが北星余市高校の特徴であり、その際に3年生や生徒会が中心的な役割を果たしている。例えば、ある年の1年生研修では、上級生が「自分たちの準備不足のせいでうまくいかなかった。どうしたら良いだろうか」と泣きながら語りかけ、それにつられるように後輩も次第に集まってくるといった形で進められるなど、生徒たちの試行錯誤によって行事が作り上げられている。

②学校行事に関する生徒の声

「団結」という言葉は、生徒たちが入学当初最も恥ずかしがる言葉の一つであるが、時間の経過とともに、それが北星余市高校の誇りであるとも言うようになる。後述する放送局作成のドキュメンタリーのタイトル「DAN☆KETSU」にも、このことが表れている。生徒たちは1つひとつの学校行事を通してまとまりを練り上げていく。生徒へのインタビューの中から、行事に関わるものをいくつか紹介する。

- ・一年生のときはやる気もなく喧嘩もあったけど、学年が上がるにつれて、いろんな県から来てるし、もうたぶん北星卒業したら会うことがあるのかなって子もいるから、だからそういう子たちとの時間も大事にしなければなって思った。達成感を感じられる経験が出来たのが、皆が変わったきっかけだと思う。
- ・北星祭が一番楽しい。クラスが仲良くなった。人間関係がよくなって、みんな性格がまろくなった。
- ・最初はバラバラでしたね、元気な子と大人しい子と。グループが分かちちゃってて、喋るのも全くなかったんですよ。今ではすごいまとまってますね。クラスでも元気な子が大人しい子に声をかけたりとか、おとなしい子も元気な子に声をかけられるようになったりとか。すごい変わりましたね。行事からだんだん(仲が)深まっていくみたいなの。
- ・北星祭が一番好き。行事への取組がクラスのみんなを団結させる。行事は、みんなを仲良くするパワーとなる。普段話さない人とも話すことが出来る。今はみんなごっちゃで話す感じになりました。

北星余市高校では、生徒会が多くの行事を企画する。前述の1年生研修のように、生徒たちは1年生のときから生徒会の先輩の姿を見ているため、それが生徒会への興味を持つきっかけの一つになると考えられる。インタビューでは次のように語られている。

- ・先輩の姿を見て生徒会は楽しそうだなと思って入ることにした。自発的に毎日21時まで行事や学校の問題について会議をしていた。授業と違って自分がやりたいことがそこにあるから、一生懸命に取り組めた。辛かったけど思い出がある。
- ・行事をつくるのは大変だけど、そこで学んだこともあったし、生徒会は楽しい。辛いこともあるけど、完成した時の達成感は今でも忘れられない。

③委員会活動や部活などへの参加

また、ボランティア委員会や放送局などの活動も生徒が主体となって行われる。こうした活

動はやりたい生徒が集まって組織されており、例えばボランティア委員会では、人数が多く、毎週末のように活動があるため、「この日に都合がある人はここに集合」といったように緩やかな参加形態で行われている。ある生徒は、以下のように述べている。

・放送局では、今まで話したことのない子もカメラ（の前）だと素直にしゃべれたり、おちゃらけたり、その人の素顔が見られるのが楽しい。ボランティア局ではグループホームや保育園に行く。楽しいのは「いろんな人の笑顔が見れる」こと。実際に接してみなければ「ただの身体の悪いおじいちゃん、おばあちゃん」としか感じなかったかもしれないが、実際に会うと優しく「助けてもらっているのが申し訳ない」と思っている人がほとんど。そのような、今まで知らなかった考えがわかり、ふれ合うことが出来るのが楽しい。

放送局では、朝の礼拝といった日常的の業務や学校行事の手伝い、さらに、全国規模のビデオフェスティバルに出品するなど、幅広く精力的に活動している。近年では、20 歳以上の生徒に焦点を当てて北星余市高校の生活や今後の目標などをインタビューしたビデオも作成している。こうしたビデオの題材は生徒たちで案を出して決めている。他にも、2012 年には「北海道映像コンテスト 2012」の学生の部で、放送局のドキュメンタリー『DAN☆KETSU』が最優秀賞を受賞している。授賞式では放送局の生徒が「僕たちの高校はこれまでメディアではあまり良い報道をされないことが多かったけど、実は先輩と後輩の絆がとても深い、素敵な学校だということを知ってもらえたら嬉しい」と述べている。

④小括

以上のように、学校行事・生徒会の活動には共通して「生徒が主体である」という特徴が見られる。北星余市の生徒たちは、過去に様々な経験をしていることもあって、自分自身でも言葉にできないような強い想いを持っている。そうした内発的な想いこそが、主体的な活動の原動力となっていると考えられる。それまでの学校経験において否定的な想いを抱えている生徒たちにとって、学校行事や生徒会活動は過去の経験したことのない新たな挑戦である場合が多い。そうした活動に仲間たちとともに取り組むことを通して、自発的（内発的）に取り組む姿勢や、達成感を得ることに繋がっているのだと考えられる。

（３）授業

（担当：近藤なつみ）

①授業に関する特徴

本節では、主に授業や勉強についての生徒の考えを中心に取り上げる。教員への調査の中で、北星余市高校の教員たちは中学校レベルの学力を身につけさせることを目標に授業を行っていると話していた。しかし、年齢も学習歴も様々な生徒たちが同じ教室で学んでいるため、一人ひとりの授業理解にも大きな差が生じてしまっている。そのため、最近では、幅広い学力層に対応できるよう、一部の教科で選択授業を行ったり、教員が工夫を凝らした授業をしたりなどの対策を行っている。そのような中で、まずは生徒たちが授業や勉強についてどのように考えているのかを見ていく。

②授業の難易度と楽しさ

授業については、「難しい」と答えた生徒から「簡単だと思う」と答えた生徒まで、多様な回答が見られた。これは、北星余市に入学する以前の学校経験や勉強にどのように取り組んできたかという学習歴などと関係が深いように思われる。例えば、授業が「簡単だと思う」「前に通っていた高校と比べると簡単」と答えた 2 名の生徒は、他の高校に 1 年近く通っていた。また、「難しい」と答えた生徒は中学生の頃にほとんど学校に行っておらず、「全部の授業が難しいと思う」と話した生徒も中学 1 年生の終わり頃から学校に行けなくなり、その後入学した通信制高校も程なくして通わなくなった。なお、他にも授業の難易度が「教科によって違う」と答えた生徒が何名かいたが、いずれも北星余市以外の高校に通ったことがない他には学習歴

は様々だった。教科によって難易度が異なると感じる理由は、単純に学習歴のみで推察することは難しく、教科に対する生徒自身の興味・関心や教員の授業実践なども関わってくると思われる。しかしながら、生徒の学校経験や学習歴は、授業を難しいと評価するか否かに大きく関わっているように考えられる。

一方で、北星余市の教員たちは、生徒が意欲的に授業に取り組めるよう、工夫を凝らした授業を行っている。中学校で学ぶことの基礎を身につけてこられなかった生徒にとって、高校の教科書を授業の中で理解することは難しいため、北星余市では一人ひとりの進度に合わせやすいようにプリントを使った学習法が取り入れられており、教材も教員が生徒たちに合わせたものを採したり開発したりしている。ある教員は授業について、「生徒が『楽しい』とか『面白い』とか『知る、ってすごいね』『知る、って面白いね』と気付ける授業にしてあげないとな、って思っています。」と語っており、生徒が自ら「知りたい」という探究心を持って取り組んでいけるような仕掛け作りを授業の中に取り入れている。

このような教員の授業実践に対して、生徒たちに授業が楽しいと思うかを尋ねたところ、7人の生徒のうち6人が「楽しい」「〇〇（教科名）は楽しい」などと答えた。さらに、「（授業の内容が）わかるようになれる」ところが楽しいと話した生徒や、「わかりやすい授業は楽しい」と答えた生徒も見られた。しかしながら、授業が楽しい理由として最も多かったのは、「先生が面白い」「（ノリの良い先生で）楽しい」など、勉強の内容などではなく、教員の話が面白いので授業が楽しく感じるといった意見だった（6人中3人）。ただし、中には「授業自体が全然わからないので退屈だけど、中学校の授業と比べると先生の話が面白く、わかりやすく教えてくれて授業を受けやすく雰囲気を作っているから、自分も少し勉強しないといけないな、という気持ちになる」と話す生徒もいた。教員の楽しい雰囲気作りが生徒の勉強に対する意識形成にも影響を与えていることがわかる。

③授業態度と勉強への取り組み方

授業態度については、学年が上がるにつれて自分や周りの生徒の授業態度が変わっていったと話す者が多かった。例えば、次のような話が聞かれた。

- ・2年生の時は寝ていたことも多かったけれど、最近はあまり寝なくなった。
- ・1年生のときは授業をさぼったり、携帯を見ることがよくあった。でも、学年が上がるにつれて皆おとなしくなると思う。

このように授業態度が変化していく理由について、ある生徒は「かっこ悪いと思ったからではないか」と答えている。彼／彼女らの語りには先輩への尊敬や憧れが特徴的にみられるが、学校生活を通して先輩の姿をモデルにしいく中で、授業の中抜けやさぼりを「かっこ悪い」と思うようになる意識の変化が生まれ、それにより生活態度が落ち着くといった変化にも結びついていることが考えられる。学年とともに生じる生徒の変化は、生活指導からも見ることができるが、学習面でも生徒は次第に変わっているのだと考えられる。

しかし、授業態度には意識の変化が見られる一方、学習への取り組み方については変化が見られない。特に、学校以外の場における学習については、普段から家庭学習を習慣にしていると答えた生徒は1人もおらず、ほとんどの生徒が「勉強は学校でのみ」「テストが近い時に授業以外で勉強する」などと話していた。生徒たちがこのように答える理由の一つとしては、北星余市高校では宿題を課していないことが考えられる。一般的に多くの高校生は、家庭学習の習慣がなくとも宿題がある時には、気が進まないながらも家で教科書やノートを開くものであろう。北星余市高校では、そのように半ば強制的に家庭学習をしなければならない宿題というものが出されないが、それには理由がある。ある教員は、「なぜ宿題を出さないのか」という保護者からの問い合わせに対して、「学校に来るだけで精一杯の生徒がいるという現実の

中での対応」であって、「勉強よりも、学校が好きで学校に来られることが大切なのです」と説明したという。こうした対応は、不安定な生活を送ってきた中で勉強どころではないという生徒の実態を考慮してのことであると言える。

④高校での学習の意味と教員への要望

次に、「学校で勉強する意味は何か」と聞いてみたところ、全員が何らかの考えを答え、学校で勉強する意味を見出していない生徒はいなかった。勉強する意味として最も多く聞かれたのは、「高校卒業資格のため」であった（7名中3名）。この背景には、不登校や高校中退の経験が強く影響していると思われる。その他には、「進学のため」や「将来のため」、「将来、自分の子どもに教えられるように」、といった理由が聞かれた。また、「私生活も含めて勉強だと思っている。45分という短い時間でも集中しないと、将来、他の事でも集中できないだろう」と生活面も含めて話す生徒もいた。北星余市の生徒たちが授業に出席して勉強する理由は、ただ進学のためだけではないことがわかる。

一方で、「授業を行う先生への要望はあるか、あるならばそれはどのようなものか」を質問したところ、7人中5人の生徒が「特にないです」「今の授業に満足している」「今のままが一番楽しい授業です」などと答えている。なお、この5人のうち3人は、授業が「難しい」あるいは「教科によっては難しい」と答えた生徒であった。また、「授業、勉強はあまり楽しいとは思わない」と答えていた生徒も、先生への要望は「特にない」と答えた。

つまり、授業が難しいと感じている生徒や、授業や勉強が楽しいと思えない生徒がいるにも関わらず、彼／彼女らは教員に対して授業で改善してほしい点を挙げなかった。その理由としては、北星余市以前の学校経験と比較しての印象の良さも大きいと思われるが、教員が既に十分な努力をして工夫した授業をしていると考えているため、もしくは、学力層の幅広いクラスの状態を鑑みた上での一種のあきらめを含んだ発言ではないかと考えることができる。教員への要望を述べた生徒が少ないといっても、必ずしも理想的な授業が行われているとは言えないだろう。他方、要望を述べた生徒2名は「笑いを取りつつ、固くない授業にしてほしい」「わかりやすい授業にしてほしい」と話していた。

⑤小括

インタビューをした生徒たちは、それぞれが勉強する意味を見出し、ほとんどの生徒が以前と比べて授業態度を改めたと話していたが、授業以外での日常的な学習などは行われていなかった。勉強どころではない生徒たちにとって宿題は大きな負担になるものであるが、下宿生の多い北星余市高校であればこそ家庭学習によって生徒同士のコミュニケーションを増やすことにつながるといったメリットも考えられる。また、卒業後に大学・短大や専門学校に進学する生徒が増えており、そこでの学習に繋げることが高校としての課題となっていることから、生徒の学習習慣をどのように形成していくかも考えていく必要があるだろう。学年が上がるにつれて自分の生活態度を見直し、進路について考えるなど態度や意識には変化が現れているが、そうした進路を実現するための具体的な行動にまで移すことができていないように思われる。卒業後の進路形成にあたっては家庭学習などによる自主的な取り組みが必要になるため、主体的な学びを定着させることが課題であると考ええる。

（４）進路指導

（担当：小林大造）

①北星余市の進路指導とは

現在、進路指導は北星余市高校において重要な課題となっている。同校では、北海道で有数の伝統を誇る北星学園大学をはじめとした系列校を中心に、多くの推薦枠を生徒に提供してきた。そのため、一般入試では合格することが難しい大学でも、3年間の高校生活の中で一定の

基準を満たせば校内推薦によって進学することが可能となっている。

一方、「北星余市高校では勉強の前に様々な人間関係を学んでほしい」（教員インタビューより）と考えている。学校HPにも、「推薦枠を確保出来ている大学が多々あります。いづれにしても『北星余市』の進学指導は、基本的には3年間の地道な努力の上に立った推薦入学を推奨するものです。ガリガリと受験勉強を強いて、受験競争に勝たせる指導ではありません」とあり、進路指導に関しては一般的な高校とは異なる印象を受ける。

②進路指導における課題

このように、北星余市高校では学力だけでなく多面的な学びを重視することで、様々な困難を抱えて高校に通う生徒たちが進学しやすい仕組みを用意していることがわかる。

しかし、近年では、北星余市を卒業後に進学した大学等での中退が大きな課題となっている。こうした中退の背景として、基礎学力が問題となっている。大学での授業についていけなくなって辞めてしまうという例がいくつもあることが教員にも認識されていた。

また、生徒たちも卒業した先輩の話などに、「北星余市は甘いから」、卒業した後に苦勞するといった話を聞くそうである。しかし、こうした認識にも関わらず、主体的に学校の試験以外の勉強をしている生徒はあまりいない。現状のように、推薦を得るために必要なテスト対策としてだけ勉強をするということは、「受験勉強を強いることのない指導法」ではあるかもしれないが本来の理念とは少し異なった姿になっているようにも感じられる。それがゆえに、進学先での中退率も高くなっており、「北星余市は甘い」という意見が出ているのではないだろうか。しかしながら、生徒自身が「北星余市は甘い」と自覚していることは現状における進路指導や学習面の課題を認識していることの現れでもあり、何らかの対策を期待しており、受け入れる用意があるとも言えるのではないだろうか。

③生徒の進路指導に対する考え

このように、教員も生徒も将来の夢と現在の就学状況との間にギャップがあることを感じている。そして、進路指導に対しても不安を感じてはいるが、生徒はそうした課題を乗り越えるための主体的な行動をとれず、教員も生徒が行動を起こすための後押しを出来ずにいるように思われる。この点を、インタビューでの生徒の言葉から確認する。生徒たちは、自分の将来のために何をすればいいか明確には分かっていたり、先生と生徒の間にも認識のズレのようなものがあるようにも思われる。

- ・大学は指定校推薦を考えている。教師になるには一生懸命勉強しなければいけないと思っている。学校の勉強だけでは足りないかもしれないが勉強はしていない。（「なぜ？」と聞くと）まだいいかな。（授業で精一杯なので）それ以上の勉強をすると、今やっていることがやれなくなる。
- ・進学の情報は学校に置いてあるパンフレットやネットで調べたりしている。北星の人は、意外に将来の目標が決まっている人が多いので、先生に進路の相談をする人はあまりいない。
- ・（進路に関して）先生も言葉足らずでよくわからないことがあったときに先輩に相談したら、あの先生の言いたいことはこうなんだよと教えてくれたりした。
- ・担任の先生が抜けていて何もやってくれない。北星って北海道にあるから、北海道の学校のパンフレットが多くて他の地域の専門学校の資料があまりないから、視野を広げてほしい。自分たちで調べろと言うのもわかるけど、保育に行きたいと決まっても、どういう制度があるかわからないし、もう少し保育の専門知識のある人とか、ある程度アドバイスのできる人がいたらいいのになと思う。

④小括

インタビューの中で将来の夢や進路などを聞くと、「とりあえず就職」などと具体的に決まっていな生徒もいれば、「教師」「料理系の専門学校に行きたい」などと進路希望が具体的に決まっている生徒もいた。インタビューをした生徒では、進路希望が詳しく決まっている生徒ほ

ど、今、勉強する意義について自分なりの考えを持って語っていた。しかし、そうした生徒であっても、「将来の進路のために今何をしているか」という問いには、戸惑ってしまったり、まだ何もしていないと答えたりする生徒がほとんどであった。

北星余市の進路指導では、指定校推薦による進学が多いことから、日常的な授業やテスト、行事などの学校生活を着実に歩んでいくことが重視されていると言える。こうした学びのあり方は、受験学力に偏重した学校制度の中で中退や不登校を経験してきた生徒たちにとっては望ましいものであろう。しかしながら、その先の進路に関する問題を考えた時には、卒業後の人生を歩んでいくための準備を高校在学中に整える必要があることから、現在の学校生活における学びの意義と関連させながら、主体的な進路形成を可能にするための指導を展開していくことが求められるのではないだろうか。

（５）生活指導・校則

（担当：高嶋真之）

①生活指導のはじまりと教員と生徒の関係

北星余市高校では、設立当初から校内事件が頻発していたこともあって、生活指導の方法と実践が蓄積され、現在まで受け継がれている。そうした経緯からみても、生活指導は同校の教育実践の柱として位置付けられている。ここでは、その取り組みの様子が生徒の目にはどのように映っているかを述べながら、生活指導の意義について考察していく。

北星余市高校の生活指導に関する実践を紐解くと、教員と生徒がお互いぶつかり合いながら言いたいことを言い合う「話し合い運動」が始まりにあり、そこから生徒とできるだけ多く接し、生徒の生い立ちや家庭などについてよく知ることで、「生徒を立体的に捉える」（教員インタビューより）という考え方が生まれてきた。こうした実践は、校内事件が頻発していた時期に、教員と生徒の深い溝を埋めるべく確立された生活指導の方法であった。現在では、全国から集まった多様で複雑な背景を抱えた生徒たちを理解するために、生徒に寄り添い、生徒と日々関わり続けるという方法が生活指導の要となっている。

こうした教育実践を背景として、北星余市高校の教員—生徒関係は極めて良好である。例えば、教員インタビューでは、教員—生徒関係が次のように語られてきた。

・「先生」という先生はいないんじゃないかな、うちの学校には。「私は先生です」というような、授業を教えてやるという先生は、昔は１人くらいいたけれども、嫌われているというか人気がないんだよな。みんな友達感覚というか。

また、生徒インタビューにおいても、教員との関係を「フレンドリー」「距離が近い」などと表現していたが、その他にも、教員と生徒がお互いにあだ名や下の名前で呼び合うことや、休み時間に職員室に行く生徒が多いことを複数の生徒が特徴として挙げていた。このように中学校や他の高校と大きく異なる状況に、「何から何までおかしいんじゃないか」とさえ思っていたと語る生徒もいたが、おそらく、多くの生徒が同じように感じていたのではないかと思われる。けれども、教員と生徒の心理的な距離を徐々に縮めていくことで、教員と生徒の間の良好な関係性を構築することに繋がれていると考えられる。

一方で、こうした指導方法においても教員と生徒がぶつかり合いになることがある。

・先生に「謝れ」みたいなことを言われて、（自分は）頑固なんで、「先にそっち（先生）が謝れ」みたいな感じになって、先生も私もむっちゃ怒ってて。「いつもは先生らしくないのに、突然先生っぽくして、逆に無理じゃない」みたいな感じで、（先生と）ぶつかりあったこともありますね。

この生徒がどのようなことをして先生に「謝れ」と言われたのかまでは知ることができなかったが、このエピソードから教員と生徒の関係性の一端をうかがうことができる。ここでは、ぶつかり合いながら互いに言いたいことを言い合う様子が現れている。こうした対立があると、

一般的には生徒も教員も互いに敬遠しがちになると考えられるが、北星余市高校ではそうではない。この点について、先ほどの生徒は北星余市高校の教員について以下のように述べている。

・（北星余市の）先生は、「もうえーよ」って思うくらいのことをしてくれる。（他の学校の先生は）人間味がないって感じがするけど、ここの先生はあったかい。

この生徒が感じているように、教員が時間をかけて生徒としつこく関わりを続けることによって、単なる「友達感覚」の関係性でも、権威的で威圧的な関係性でもなく、人間的な関わりに基づいた関係性が教員と生徒の間に形成されていくことがわかる。

②生徒の目から見た校則

北星余市高校では、教員と生徒が日常的に関わり合う中で生活指導が行われているが、その生活指導が前景化する場面が、校則に触れ、処分の対象となる時である。生徒インタビューでは校則に関して、大きく3つの認識がみられた。1つ目は「普通」という認識であり、謹慎・退学となる禁止事項（例えば、喫煙・飲酒・暴行・犯罪など）が他の学校と共通していることによると考えられる。2つ目は「緩い」という認識で、北星余市高校が他校と異なり、服装や髪型が自由であることや授業規律が緩やかであること、教員—生徒関係の近さなどが影響していると考えられる。3つ目は「よくわからない」というもので、そもそも校則が生徒に明文として認識されておらず、慣習法のようなになっていることによると思われる。また、謹慎等の処分については、「怒られて当たり前」のことが校則になっているため、校則違反をして処分を受けることは仕方ないなどと述べられており、生徒も謹慎処分等を含めた生活指導のあり方に一定の理解を示していることがわかる。

このような生徒の校則観は、日常の学校生活では「授業規律」において特徴的に現れている。北星余市高校の授業規律は「授業以外のことはしてはいけない」という点において他の学校と大差はないが、授業態度に関して「ダメ」と注意するタイミングが教員間で一致していない。この点が、生徒の目から見たときの校則の緩さ・曖昧さに繋がっていると考えられる。そのため、授業に積極的に参加している生徒がいる一方で、授業中に寝ている生徒、携帯電話を使っている生徒、耳にイヤホンを着けている生徒、教室から出ていく生徒など、授業中の生徒の様子は様々である。こうした状況は一般的には否定的な評価となるものであろう。しかし、北星余市高校では、校則は違反者を排除して校内の秩序を保つためのものだと考えていないので、一定の柔軟性を認めることで、多様な背景を持った生徒たちの高校生活を保障することが可能となっている。こうした寛容さをベースにした上で、喫煙や暴力など法律に違反するような行為に対しては、謹慎などの処分を伴う厳格な生活指導が行われているのである。

③校則のもつ機能

北星余市高校の考え方として、校則違反に対する処分は、学びを停める「停学」ではなく、あくまでも「謹慎」を中心としたもので、今までの自分の生活や行動と向き合い、振り返る期間として位置づけられており、自ら反省するように促すことが生活指導の目的とされる。謹慎処分を受けたことのある生徒は、1クラスに十数人いるようで、インタビューをした生徒にも喫煙で謹慎処分を受けていた者がいた。その生徒は謹慎処分について「辛い」「嫌」と言葉を並べていたが、「煙草を吸えない学校だって知ってて、こっち（北星余市高校）に来ているんで」と、納得した上での謹慎だと話していた。また、謹慎処分を受けた友達の話をしてくれた生徒によれば、「（謹慎の）館は大変だけど学ぶことがたくさんある」と感じたり、「（地元に戻されても）学校に戻ってきたい」と考えるようになるとのことである。こうした点にも、北星余市高校の生活指導の一つの成果が現れていると言える。

また、生活指導の効果は、長期的には授業態度をはじめとした学校生活の全般に大きく影響を与えており、生徒の実感としても学年が上がると落ち着いてくる様子が語られていた。生徒

たちは、北星余市での学校生活の中で、少しずつ価値観を変容させながら、校則違反や授業態度の悪さを「かっこ悪い」と考えるようになっていくようである。そして、生徒インタビューの中からは、この「かっこ悪さ」に対して真剣に行事等に取り組む先輩の姿に「かっこよさ」を見出し、先輩をモデルに自己を変容させながら、次第に後輩へと引き継いでいくような回路が整っている様子が見受けられた。こうした先輩後輩関係も北星余市の生活指導の実践の中で形作られたものだと言えるだろう。

④生活指導の課題と小括

最後に、生活指導に関する課題として、生徒インタビューから聞こえてきた謹慎処分等に関する意見について取り上げる。具体的には、喫煙などの指導方法に関して、現行犯の場合のみ処分の対象とするか、目撃情報だけでも処分するか、といった話であった。生徒の側からみると、処分の基準が不明確で、同じことをしても処分が異なっていたり、自分たちの意見が聞き入れられていなかったりすると感じられることがあるという。この点について、教員に質問したところ、北星余市の特徴である日常的に生徒と関わり合う生活指導だからこそ生じている問題だとも言えるようである。つまり、謹慎処分等の内容は、形式的に違反事由に対応して決められるわけではなく、生徒指導部の教員を中心に話し合っただけでなく、日頃の生活状況などを含めて、その生徒の実態に応じて、その時に必要な指導はどのようなものか、という視点が重要になる。そのため、喫煙などに対する処分でも、本人は教員との話し合いで納得していたとしても、周りの生徒の目には、「同じことをしているのに処分の重さが違う」と写っている可能性もある。

生徒インタビューからも明らかなように、生徒たちは北星余市の教員が生活指導に力を尽くしていることを実感しており、その困難さ・大変さも共有している。こうした日常の学校生活を通して築き上げてきた関係性を考えると、処分のあり方などを生徒たちに伝えていくことも可能であると思われる。謹慎処分等の問題については当該生徒に配慮した対応が基本となるが、周りの生徒たちが抱く不安をどのように解消していくかが課題であるといえるだろう。

以上のように、生徒に向き合い、関わり合いながら行う生活指導が、通信制高校や高校卒業認定試験などでの学び直しとは大きく異なる点であり、北星余市高校における高校生活の保障を考える上で重要な意義をもつものとなっている。

(6) 放課後・下宿・寮

(担当：謝苗子)

①放課後の生活について

北星余市高校では、高校中退経験者などの転編入制度を導入して以来、全国各地から様々な生徒が集まっており、現在は生徒の約7割が道外出身者である。実家から遠く離れた余市の町で高校生活を送っている生徒たちは、学校以外の放課後の時間がどのように過ごしているのだろうか。本節では放課後や下宿・寮での生活に焦点をあててみていく。

まず放課後に関して、北星余市の生徒たちの過ごし方としては、主に部活や遊びが中心となっている。部活では、11の運動部と8つの文化部があるが、「同好会みたい」という生徒も多いように、「競いたい人は競い、競いたくない人は楽しむ」という北星余市のホームページにある言葉通りの雰囲気である。毎日活動している部はほとんどないので、何個か掛け持ちする生徒も多い。また、授業を難しいと話す生徒も部活を通して楽しいと感じられることを見つめられており、学校生活でのやりがいとなっていることがわかる。

一方で、部活をしていない場合は、放課後は「外で遊ぶ」と話す生徒が多かった。遊びといっても、お金を使うような遊びではなく、友達と海に行ったり、山に行ったりと余市町の自然の中で遊ぶことが多いようである。生徒たちも、「この辺りは何もない」「昔ながらの遊びをし

ます」と話しているように、余市の町には都会のように若者が遊ぶような施設はないため、どこかに遊びに行きたいと思っても行けないのが実情である。また、こうした遊び方の背景には経済的な厳しさもある。例えば、ある生徒は、「週 1000 円のお小遣いなので、あまり遊びに行けない」「月に 1 回小樽に遊びに行く。札幌には一学期に 1 回行くか行かないか」と話すように、経済的に豊かではない家庭が少なくない北星余市の生徒の多くは自由になるお金が限られるため、余市に隣接する小樽市まで往復 720 円かけて JR を使って遊びに行くのも負担に感じられている。そのため、「外で遊ぶ」ほかに、下宿に帰って自分の部屋で DVD を見たり、パソコンに向かって自分の時間を過ごしている生徒が多い。

放課後の過ごし方に関して、今回のインタビューで特徴的に感じられたのが、アルバイトを探すことの困難である。余市町のような農村地域では若者がアルバイトできる場所が少ないこともあるが、町の人達の中には北星余市高校の生徒に対して「服装が変」「マナーが悪い」「ヤンキー」などの悪いイメージもあるため、アルバイトを探しても北星余市の生徒ということで雇ってもらえないことがあるという。そうした現状に対して次のように話す生徒もあり、限られたアルバイト先で信頼を得られるように努力する様子もみられた。

・「もう（アルバイトが）嫌だけど、仕方ないじゃないですか。結局、私が「もう行けん」とサボったりしてしまったら、（自分は）卒業するからええけど、次 2 年生の子がそこで雇ってもらえなくなるから。北星は、やっぱバイトで雇ってくれるところが少ないから、（今、雇ってくれている場所できちんと働くという）責任感もあるし。」

④下宿・寮での生活

北星余市高校では、生徒の約 7 割が道外からの入学者で、余市町以外の道内出身者も加えて、9 割近くの生徒が下宿や寮での生活を送っている。そのため、北星余市高校では、親元を離れて通う生徒たちが安心して暮らすことができるように、同校の生徒のみを受け入れてくれる生活の場として、余市町民による民間経営の下宿・寮 30 数軒と提携している。

今回の調査でも、ある教員は、「遠くから入学している生徒たちの親代わりとして、高校生活をサポートしてくれている」、「教育の一環に欠かせない」などと話しており、北星余市高校の教育において、下宿や寮は重要な役割をはたしていることがわかる。以下では、下宿・寮での生活と関わって、規則や人間関係、管理人の存在などについてみていく。

第一に、規則については、各下宿・寮での生活上の規則はそれぞれに異なっている。下宿・寮によっては、門限だけでなく比較的細かいルールがある所もあれば、生徒と話し合いながらルールを決める所もある。例えば、夕食にしても、時間に遅れて帰るときに管理人に言っておけなければ、食事を残して置いてもらえないところがあったり、17 時半から 21 時までずっと置いてあったりするところもある。

第二に、下宿・寮での人間関係については、本人次第のところが大きいといえる。何人かの生徒が「最初に仲良くなるのは下宿の人」と話すように、学校以外の場で多くの時間を過ごすことになる下宿・寮を起点として、先輩後輩を含めた人間関係を形成していく生徒が多いことも北星余市の特徴であると言える。しかし、その一方で、「下宿に戻っても人間関係が大変だから、ストレスもたまるし、夏休みまで我慢しようとやってきた感じ」と話す生徒もいる。北星余市には多くの下宿・寮があるが、それぞれに特徴や雰囲気の違いがあるために、生活に慣れてくると、自分に合ったところを探して下宿・寮を変更する生徒も少なからずいるようである。

このように下宿・寮での人間関係は人によって様々であるといえるが、北星余市の生徒たちにとって自分の生活を見つめ直し成長する機会を与えている存在として、先輩との関係は重要である。下宿・寮において、挨拶の仕方から進路の相談まで色々と教わっていく中で人間関係

の大切さを再認識したり、ケンカなどのトラブルが起きた際にも先輩が仲裁する姿を見て人間関係の修復ができるようになっていったりと、多くのことを学んでいるようである。また、悩みを抱えているときには、同じ道を歩んできた先輩がもっとも相応しい相談相手ともなっているようでもある。ロールモデルとしての先輩の成長を自分の目を見て、意識することで、自分もそういうふうになりたいと思うようになる。こうした先輩への憧れや尊敬の感情は、インタビューを通して特に印象的に語られていた。学級単位や同年齢だけではない多様な仲間集団が下宿・寮を中心に形成されていることは、北星余市高校の重要な特色の一つとして捉えることができる。

第三に、下宿・寮での管理人の役割については、以下の生徒の言葉からも明らかである。

- ・おじさんとおばさんは自分たちの親みたいに怒ってくれる。そんなに厳しくはないが、怒るところはちゃんと怒ってくれる感じ。
- ・体調を崩して動けないときは助けてくれる。やっぱり一人きりよりは安心感がある。
- ・下宿のおばさんとは親に相談しにくいことも話せたりする。おばさんがいてくれると安心。

このように下宿・寮は、家族から離れて縁もゆかりもない余市の町で高校生活を送る生徒たちにとって、家族のような温もりが感じられる場であり、親や教員とは異なる大人との関係性を持てる場でもある。また、こうした下宿・寮での人間関係は、家族との関係を良好に変化させていくきっかけにもなっている。つまり、管理人との関係性は「親子関係」、先輩後輩との関係性は「兄弟関係」に近いものであるため、そうした人間関係を通して自分の家族との関係性を客観的に捉え直すことを可能にしているようである。インタビューでも、「家族との関係がよくなった」「(経済的に)無理して(学校に)行かせてもらっている。親のためにも頑張っている学校に行っている」「(以前はあまり会話がなかったが、北星のブログを見て)『どうだった』と連絡してくる」「親元を離れてみて通わせてもらっているという気持ちが強くなった」など、ほとんどの生徒が家族との関係が好転したと話している。

⑤小括

今回のインタビューを通して、北星余市高校にとって、下宿・寮は生徒と学校を繋ぐ上で大切な場になっていると感じた。ある教員は、「学校に来なくても、下宿でさえいればいつかきっと学校に行きたいと思うようになる」と下宿の重要性について語っていた。共同的な生活の中で、毎朝仲間たちと学校へ向かう雰囲気は、不登校だった生徒にとっても自然と学校に足を向かわせる力になっているように感じられた。そして、下宿・寮の「おばさん」「おじさん」、先輩・後輩を含めた仲間たちと、時にぶつかり、時に励まし励まされるという関わり合いの中で、生徒たちは自分自身の生活を見つめ直し、少しずつ主体性や自立性を自覚していくようすが見られた。高校中退や不登校を経験し、学校生活から離れていた生徒たちにとって、地元の同級生や遊び仲間、家族との関係から一度距離を置くことによって、安定した生活を取り戻し、それまでの関係性を見つめ直し、良好な関係として再構築していくことが可能になっているのだと考えられる。様々な困難を経験してきた北星余市の生徒たちにとって、学校に通い直すためには、安定した生活の基盤が不可欠であるが、下宿・寮の存在はそうした意味においても不可欠なものとなっている。

3. 北星余市高校における学びに関する考察

(担当：伊藤健治、高嶋真之)

(1) 生徒が実感する学びとは

以上のような北星余市高校における生徒たちの実態を踏まえて、彼／彼女らが学校生活を通して学んでいること、あるいは自己の成長として実感していることが、高校教育における学びとして、どのような意義を持つのかについて考えていきたい。

今回のインタビューでは、「授業」「学校生活」「私生活」といった高校生活の実態を把握するための質問項目を設定したが、その中で多くの生徒から自身の成長の契機として「人間関係」をキーワードとするエピソードが聞かれた。このことは、「集団づくり」や「民主的な人間関係」などといった北星余市高校の伝統的な教育実践の現れであると考えられるが、人と人との関係性を重視した教育によって、生徒自身が学びや成長を実感していることがわかる。また、彼／彼女らが「人間関係」という言葉で自身の学び・成長を表現するのは、単純に「友達をつくる」「仲が深まる」ということ以上に意味のある経験が含まれていると考えられる。そこで、本節では、「人間関係」をキーワードとして、北星余市高校における学びの意義について考察する。

（２）自己を見つめ直す視点の獲得

すでに述べたように、北星余市高校では、クラスメイトや生徒会、部活動、ボランティア活動など学校生活における生徒同士の人間関係だけではなく、教員との関係、下宿・寮で共同生活を送る先輩後輩を含めた密接な仲間関係など、多様で豊かな人間関係が特徴となっている。以下のように、生徒たちの多くは他者との関係の中で自らの成長を語っている。

- ・1年生のときは、自分が間違っている相手の意見を認めなかった。3年生になり、「こういう人もいるんだ」という発見ができるようになり、また、人の意見を聞くようになり、自分が腹立つとか自分の感情だけじゃなくて、相手のことを考えるようになった。
- ・周りの子たちを見てると「頑張ってるな」って思う。友達にも真面目な人がいるので、みんなそれを見て、取り込んで、「自分も頑張らないと」って考えるようになった。
- ・「雰囲気が変わった」「落ち着いたね」って言われるようになった。自分でも穏やかになったように思う。…先輩もやさしくて友達もいい人ばかりで、そんな中自分だけ変わらないのはおかしい。気付いたら変わっていた。

生徒たちの語り方は様々であるが、周りにいる人々との関係を通して成長している様子をうかがうことができる。生徒たちは、北星余市での生活を通して、様々な人間関係の中で相手のことを自分なりに理解しようとするようになる。そして、他者との関係を通して自己を見つめ直すことによって、自分自身の成長・学びへと繋げている。こうした機会は北星余市高校の日々の生活や教育実践に様々な形で埋め込まれており、次のような語りにみられるように、教員や生徒同士の関係の中で、他者を尊重する民主的な関係性を形成し、自己を見つめ直すのである。

- ・先生とかも「最近元気ないけど、どしたん」って聞いてきて、「いや、実はこうなんや」って答えると、「それは、おまえのそういうところがダメやから、ちょっと直してみたら」とか言われたり。色んな人から色んなことを言われるんで。だんだん、みんな仲良くなり、ケンカもし、ダメなところも言い合って、みたいになっていく。
- ・北星余市高校は学祭もそうだけど、他人同士と関わるという場をつくっていて、一つひとつ何かを決めたり何かを作るときに、人の意見を聞く場をつくっている。……どこの高校よりも自分で考えることをさせられて、自分たちで解決することをさせられて、自分たちだけで協力することもさせられて、やっぱり自律していく力っていうのがたぶんつくと思う。

（３）安定した日常生活の確立

北星余市高校の教育実践としての「人間関係づくり」に関しては、次章で教員インタビューに基づいて考察をする。本節では、もう一つの重要な点として、生徒たちが自己を見つめ直す上で不可欠となる、安定した日常生活の確立について述べていく。不登校や高校中退を経験した者たちにとって高校に通い続けることは簡単なことではない。その理由は、本人に関する問題だけではなく、家庭の状況や友人関係など周囲の様々な環境が大きく影響している。北星余市の生徒たちの多くは下宿・寮で生活しているが、複雑な家庭状況や地元のこじれた友人関係から距離を置くことによって、学校に通う前提条件である安定した生活が可能になるという側

面がある。この点について、生徒インタビューでは次のように語っている。

- ・もともとあまり中学校には行っていなかった。毎日夜に出歩いて、朝方酔っ払って帰ってくるという生活だった。親の体も悪く、妹の面倒を見なきゃいけないという環境から逃げ出したかった。
- ・学校に行くよりも遊んでいた方が楽しいと思った。……違う中学の友達の家でいつも過ごしていた。仲間といるだけで安心できた。家から出られるだけで嬉しかった。
- ・地元での生活がすさんでいた。地元に戻るつもりはない。地元に戻ると流されそうな気がする。
- ・親がうるさいので、親元を離れたいという思いもあった。

このように、北星余市高校への進学をきっかけに親元・地元から離れることは、家庭や友人関係を背景とした不安定な日常生活からの脱出を意味しており、その上で、新たな地で安定した学校生活を送ることによって、以前の地元の生活や人間関係を対象化することを可能にしている。生徒たちにとって、学校に通うどころではなかった以前の不安定な生活から抜け出すことは、自己を見つめ直す契機となる他者との人間関係を形成していく上で不可欠な要素なのである。

また、生徒たちが北星余市において安定した生活を手に入れるためには、下宿や寮の管理人である「おじさん」「おばさん」、「フレンドリー」で「距離が近い」教員たちなど、安定的で信頼できる大人との関わりが重要な要素となっている。特に、それまでの学校生活をネガティブな経験として過ごしてきた彼／彼女らにとって、教員との関係性は大きな意味を持っている。次のような語りからも、不安定な生活の中で学校に通う彼／彼女らにとって、教員の存在がどれだけ大きいかを理解することができる。

- ・北星余市高校の先生たちは、どうにかしてやろうという気持ちの方がでかいかなくて。中学校の先生はどっちかって言うとな勉強だけ教えてればいいという感じだった。人間としての成長ではなくて、勉強、勉強、勉強って感じだったので。
- ・北星余市高校の先生は、「もうええよ」って思うくらいのことをしてくれる。他の学校の先生は人間味がないうって感じ、北星余市高校の先生はあったかい。
- ・下宿訪問のときには「大丈夫か？」と声をかけてくれる。学校では言えなくても、下宿に来たときに相談に乗ってもらったりすることもある。不登校になった生徒の下宿を訪れて話をしたりしてくれる。先生が学校に来やすい雰囲気をつくってくれる。

このような語りからは、生徒たちが話すような「友達感覚」を超えた生徒と教員の信頼関係が結ばれている様子がうかがえる。特徴的なエピソードとして、北星余市の教員と出会ったことによって自分も教員になりたいと考えるようになった生徒がいる。この生徒は、中学生から非行を繰り返し、「問題児」として扱われ、はじめに入学した高校でも教員から「さっさと辞めないかな」と思われていると感じていたり、また、高校再入学の手続きのために中学校を訪ねた時にも「お前は高校には行かせない」と言われたりしていた。北星余市の教員たちが授業の場だけではなく、学校生活のいたるところで常に生徒と関わり続けることによって、生徒たちの学校生活が安定するだけでなく、大人への信頼を強めることにも繋がっている。学校生活を送る上で、生徒同士の関係も重要であるが、それと同様に、もしくはそれ以上に生徒と教員の関係性は重要なものであることがわかる。

（４）まとめ

本章でみてきたような北星余市高校での生徒たちの学び・成長は、同じように高校教育におけるオルタナティブな学び（あるいは高卒資格取得）の機会となっている通信制高校や高卒認定試験などでは得がたい経験であると考えられる。単に高校卒業資格を取得するだけでなく、学校生活というプロセスそのものを重視しているからこそ、生徒たちは各々の経験の中で豊か

な学びを積み重ねていくことが可能となっている。以下では、北星余市高校の学びや成長のメカニズムを整理した上で、インタビューから見えてきた課題を確認することで本章のまとめとする。

北星余市高校での生徒の学び・成長を可能としているのは、1 つには、クラス、下宿・寮、生徒会や部活など、様々な集団にゆるやかに所属することによる生徒間関係の重層的なネットワークであり、もう 1 つには、教員に対する信頼に基づいた学校生活の安定があった。また、それらの前提として日常生活の安定が重要な要素となっていることを確認してきた。この 3 つが結びつき、相互に関連し合うことによって、学校生活における自己の見つめ直しが可能となるのである。このようなメカニズムによって、北星余市高校の教育実践は、全国各地から集まった複雑な背景を持った生徒たちに対して、学校生活を「再スタート」する機会を提供しているのである。

最後に、生徒インタビューの中で見えてきた卒業後の進路に関する課題について述べる。北星余市高校では、日常生活を含めた高校での生活それ自体を保障することで、生徒たちがこれからの人生を歩んでいくための基礎づくりがなされているわけであるが、生活指導に重点を置く一方で、卒業後の進路やその指導方法に不安があることが明らかになった。

インタビューでは将来の夢について話してくれる生徒も多くいた。しかし、その夢を実現させるために、どのような進学・就職先に進むべきか、日々の学習で何をすべきかなど、具体的な進路形成に向けた動きをしている者はほとんどいなかった。このような生徒たちの漠然とした夢に対して、どのような進路指導や授業を展開することによって、夢を具体化させ、現実的な進路形成へと繋げていくことができるかが課題となっている。

また、北星余市高校では多くの生徒が推薦によって大学等に進学するが、自分自身の進路形成の見通しが十分でないことによって、進学先の大学等で授業についていけず、中退してしまうなどの問題が生じている。生徒たちも、こうした先輩たちの状況を見聞きすることで進路に対する不安を抱きながらも、具体的に何をしたいのかわからずにいることから、教員による積極的に指導によって進路形成を進めていく必要があると考えられる。

第3章 教員から見える北星余市高校

1. はじめに

(担当：横関理恵)

本章では、教員インタビューをもとに、北星余市高校の特徴を見てゆく。前章で述べてきたように、生徒インタビューでは、北星余市高校で学んだことを概ね「人間関係づくり」を挙げており、その過程で「自己を見つめ直すこと」を確立できたと感じている一方で、卒業後の進路指導の不十分さを感じていることが伺えた。

しかしながら、生徒インタビューでは、生徒からこのような評価を受ける北星余市高校の教育がどのように創造されているのかについてはみえてこない。そこで、本章では、北星余市高校の教育の特徴を把握する事を目的として、3名の教員にインタビュー調査し、それにもとづいて、どのような教育観に基づき、いかなる教育実践を行っているのか、そして、北星余市高校の教育の特徴と課題について考察する。

(1) 北星余市高校の教員の特徴

北星余市高校には、低所得家庭の生徒、不登校経験のある生徒、高校中退の経験がある生徒、少年院入所経験がある生徒など、複雑な課題を抱えている生徒がいる。同校では、生徒一人一人の個性を尊重し、一人一人違った個性を持っている生徒同士、お互いに刺激し合って教育を

受けられ、誰もが安心していられる学校づくりを目指している。

2013年度の教職員数は、専任教職員 25 名（教員 22 名/職員 3 名）、非常勤教員が 12 名である。教員の平均年齢は 40 代である。男女比は専任職員 22 名の内、男性が 20 名、女性が 5 名であり、男性教員が圧倒的に多い。

校長によると、北星余市高校の教員の抱える業務は教科指導ばかりではなく、生活指導、下宿訪問、基本的な生活習慣の問題に至るまで、多くのことに対応しなければならない。教員は、多忙な日々を送るが、それが理由で早期退職するものはいないという。むしろ、北星余市高校の教育理念と教員の教育観に合わなかったり、様々な問題を抱える生徒に対応してゆく中でやりきれなさを感じて辞めてゆくのだという（校長インタビューより、2013 年 5 月 27 日実施）。

一方、北星余市高校の教員として定着している教員は、生徒と一緒に何かをすることを楽しみ、教育内容の一部に遊びの発想を含める工夫ができたり、また、生徒たちを一面からみるのではなく、多様な側面から生徒を見ることができる人が北星余市高校の教員として定着してゆくのだと校長は述べている。但し、北星余市高校の生徒と共に過ごす時間を楽しめるように教員が成長するためには、生徒を正確に理解しようという姿勢が必要とされることがや、生徒の実態に合わせて柔軟なものの考えができるようになるなど、北星余市高校の教員として必要とされる資質を生徒と関わる中で培ってゆくことが求められている。しかしなら、新米教師の誰もが北星余市高校の生徒との初対面に戸惑いを感じるようだ。そこで、まずは、やんちゃな生徒とそうではない子が半分ずつ所属する生徒会を新米教員に担当させ、特徴の違う子どもたちが主体的に学校行事をつくりあげてゆくのをみせ「北星余市高校は他の学校とは違うという洗礼」を新米教員に受けさせる。そして、生徒とともに関わり合いながら経験を積みあげることを通して、北星余市高校の教員として次第に定着してゆくそうである（同上）。

そして、北星余市高校の生徒は、一人ひとりが重たく複数の課題を抱えているので、一人の教員がそれらすべてを引き取ることは難しく、複数の教員で一人の生徒を見てゆくという考え方が教員にあるという。校長は「北星余市高校の教師たちは、名物教員はいても、カリスマ的な教員はいない、普通の教員の集まりだからこそ、複数の教員が協力しあう教師集団力こそが必要である」と述べている。このように北星余市高校の教員の特徴には、生徒を多様な側面から見ることができ、柔軟なものの感ができることや、教師集団力を発揮して、複数の重たい課題を抱える生徒に対応し、生徒の成長発達を支え見守ることができるなどがあげられる。

（2）調査の方法と対象

教員への調査は個別インタビューにより実施した。質問項目は、教員歴や現在の担任の有無、教科担当、担当校内分掌などの基本事項、北星余市高校の教員になった経緯やこれまでの北星余市高校での教育活動について、北星余市高校の教育実践や、授業、行事・生徒会活動・部活動など現在の教育実践や学校運営について、教員関係について、学校と保護者の関係について等、北星余市高校の教育を創造している諸要素を把握するために幅広く設定した。今年度の教員インタビュー調査では 3 名から話を聞いた。

インタビュー対象者の 3 名は全て男性であり、年齢は 30 代から 50 代である。北星余市高校での教員歴は、14 年（1 名）、25 年（2 名）である。校内分掌は、校長（C 氏）、教頭（B 氏）と管理職が 2 名、管理職ではない教員は 1 名（A 氏）である。すべての教員は生徒指導部を経験している。インタビュー対象者の 3 名は、全て男性であり、管理職が 3 名のうち 2 名であることから、性別、校内分掌に偏りがある点には留意しなければならない。なお、調査方法の概略は以下の通りである。

【方法】個別面接調査（半構造的インタビュー調査）

【所要時間】1時間半～2時間程度

【日時】2013年7月30日、2013年8月1日

【調査対象者】教員3名

【調査内容】主なインタビュー項目は以下の通り

①基本情報

氏名、年齢、教員歴・勤務年数、現在の担任の有無、教科担当等

②北星余市高校でのこれまで

教員になった経緯、教育活動等

③特に現在の先生の教育実践と学校運営について

北星余市高校の教育の要点、授業、生活指導・進路指導等

④学校運営と教員の関係について

職員会議、学年、教科担当等の役割、教員同士の協働やコミュニケーションの機会、北星余市高校の教育の在り方に対する教員間の共通認識形成等

⑥学校（教員）と保護者の関係：

保護者が学校に協力的な理由、保護者との信頼関係づくり等

⑦その他、全体を通して：

北星余市高校の教育の今後の課題・展望について

北星余市高校の教師として個人的な目標

【調査者の構成】教員（1名）、院生（7名）、学生（4名）により、調査対象者1名に対して調査者4人程度で聞き取りを実施した。

2. 教員のインタビュー調査から

本節では、教員インタビューの分析にはいる前に、教員のインタビュー記録を4つの視点から分析してゆく。それらは①「学校行事・生徒会・生活指導」、②「授業・生徒指導」、③「保護者・地域との関係づくり」、④「学校運営・その他」である。本章では教員のインタビューの記録からみえる北星余市高校の教育の要点や重要視していることを個別の教員のインタビュー記録を通じて分析してゆく。以下では北星余市高校の教育について教員のインタビュー記録整理したのち、不登校経験者や高校中退者の学び直しの機会の保障との関わりで、高校教育における北星余市高校の教育の意義と課題について考察してゆく。

（1）教員A氏のインタビューから

（担当：横関理恵）

①北星余市高校でのこれまでについて

A氏は、北星余市高校での教員歴25年目の男性体育教員である。A氏は大学時代、野球部に所属していたこともあり、高校生に野球を指導したいという思いから高校教員を目指すようになる。大学卒業後は、札幌市内の私立高校で体育講師と野球部監督補佐を3年間努め、野球部の指導に熱心に取り組んでいた。勤務校の野球部は非常に強く、野球部の指導にはやりがいを感じていたが、講師という身分に不安定さを感じ、常勤の教員に転職することを考えていた。折しも、北星余市高校は、高校中退者受け入れ転・編入制度を導入し始めた頃であり、常勤の職員を公募していたので、この機にA氏は、北星余市高校の常勤教員に応募し採用となる。

北星余市高校に対するA氏のイメージは赴任する前と赴任後では大きく異なっていた。高校中退経験者は「もう後がない」という気持ちで北星余市高校に転編入してくる真面目な生徒ばかりであると思っていたが、そうではなく、入学後も退学になるギリギリのところまでする生

徒がいることに驚いた。また、野球部の指導面においても前任校と同様に、北星余市高校でも野球部を盛り上げてゆこうという意気込みを持って赴任してきたものの、放課後、グラウンドには部員は誰も集まっておらず、練習ができないという状況に落胆した。前任校と北星余市高校の学校の雰囲気が異なり、A氏は戸惑いながら北星余市高校での教員生活が始まる。

北星余市高校に赴任して2年目にA氏は生徒指導部の担当となる。はじめの頃は、生徒が喧嘩をし始めても、どう生徒指導をしてよいのかわからず、ベテランの先輩教員が生徒を指導する様子をただノートに記録しておくことしかできなかった。この生徒指導の記録は後に非常に役に立ったが、単に、ベテランの先輩の教員の指導を真似しても、生徒と年齢差がさほどないA氏は、それではうまくいかないということに気がつく。そこで、A氏は、今の自分には何ができるのかを考えるようになり、「とにかく一生懸命生徒の話を聞く」という姿勢で生徒と接するよう心がけるようになる。このような接し方で生徒と接し話を聞いてゆくと、生徒の多くが、入学前の学校経験であまり良い経験をしておらず、「とにかく教師や大人を信用していない」生徒が少なくないということを感じ始める。北星余市高校の生徒には、困った時に相談したいと思える信頼できる身近な大人の存在が必要なのだとA氏は考えるようになる。生徒とのやり取りの中から、生徒との関係性を重視した教育観が形成され、それがA氏の教育実践の基盤を支えている。

②学校行事—人間関係づくりと自信回復—

北星余市高校の教育実践の大きな特徴の一つとしてA氏は学校行事を挙げている。学校行事に参加することを通して、生徒は人間関係づくりを体験的に学ぶことができるとA氏は考えているからである。とはいえ、北星余市高校に入学ばかりの生徒の様子は、他の学校でも同様であろうが、すぐに友達になれるような状況ではない。やんちゃな生徒とおとなしい生徒が混在しており、入学直後は、生徒に人間関係作りの重要性をいくら言葉で伝授しようとしても、生徒たちには実感をもってその重要性や意味を理解することが難しいことが容易に想像される。

しかしながら、入学当初の生徒たちは、先輩たちが行事に積極的に参加し、活動している様子を見ている中で、次第に学校行事に参加できるようになるのだという。1年生の研修会では「団結の木」と呼ばれるアクティビティがある。これは、小さな一つの座布団の上に、複数の生徒が乗るものであるが、多くの生徒が小さなスペースに収まるには、抱き合ったり、おんぶしたり、支え合ったりしながら、生徒同士で協力する必要がある。1年生の研修会で導入されるこのゲームは、言葉を使用せずとも協力し合うことの必要性を生徒たちが身体で感じ取れる機会となる。

そして、スポーツ大会でも、生徒同士で頼り合う必要性が様々な場面である。学年が上がるにつれて、事前に自主練習を始めるようになるのだが、バレーボールなど複数の人数が必要な競技では、自主練習をするための人を集めることから始めなければならない。自主練習でメンバーが不足しているときには、普段の学校生活では、話をしない生徒に、「(練習するから)来てくれ」と生徒がお願いをしに行く。お願いされた生徒は、「私はこの人から頼りにされた」と感じる。このような些細なことが生徒の気持ちを積極的にさせ、今度は、その生徒の方から、他の無口な生徒に話しかけてみようとする。A氏は、スポーツ大会では、単に、身体を鍛えるということだけではなく、人との協力の大切さを学ぶ機会であるという。一つのことを成し遂げることを目標とした時に、他者に頼ったり、他者に頼られたりすることの必要性を学ぶ機会を生徒は得られる。このように生徒同士で頼り合いの必要性を学んだことによって、人とのつながりや協力の大切さを学び合い、実際に自分から他の人につながるために小さくても行動を起こそうとし始める。そこに生徒の成長をA氏は見出している。

また、別の観点からA氏は学校行事の教育的意義を生徒が自信を回復してゆく契機を得られ

る機会であるとも見ている。学校祭では、北星余市高校に入学してくる前は、おとなしくあまり目立たなかった生徒が、北星余市高校の学校祭で、クラス旗を作る大役を得て、非常に素晴らしい作品を作ったことがある。クラスの生徒はその旗を見てその素晴らしさ、驚き、「すごいね」と生徒に声を掛ける。一見するとこのようなことは何気ないことかもしれないが、他者から、自己の才能を認められのどと感じた経験が、自信を見出すことにつながられる生徒もいる。

同様に、強歩遠足では、普段の日常生活でちょっと買い物に行く距離でも面倒だと感じる生徒が、何十キロも歩くという自分の限界に挑戦できる。最初、生徒は、行事だからやらなければならないと義務を感じて参加するのだが、長距離の競歩をなんとか生徒同士で手を引っ張りあったり、支え合ったりして完走した時には、自分の限界に挑戦してやり遂げたという達成感を得られ、そのような経験から、生徒は今まで見いだせなかった自分に対する「自信」を発見する。

学校祭や競歩大会の教育的意義は生徒自身が他者から認められ、また、自己の限界に挑戦しやりきった体験が生徒の自信回復の力になっているのではいかと A 氏はみており、「高校を一度はドロップアウトし、その時々で、辛い経験をしてきた生徒は、自尊心が低下しているとみえることが少なくない。学校行事で、人から頼られ、認められた経験を通じて、自分に自信を見出し、そのことが活動に参加しようという動機となり、生徒同士で協力して何かしようと思えるようになるのではないかと述べ、このような生徒の変化に成長を見出している。

A 氏が述べているように学校行事で見られる生徒の様子やその変化は、一見すると日々の小さな出来事と思われがちだが、北星余市高校に来る前にそのような経験を得られなかった生徒にとっては、人間関係を取り結びことを学習することや、他者から認められるという経験の意味は大きいと思われる。生徒がこれらの体験ができる学校環境（学校行事など）が、生徒同士の人間関係を築き上げ、生徒の登校の継続を支える大きな励みとなっているのであろう。

③授業・進路指導—権威的な教員像の問い直し、卒業後の進路—

授業や進路指導、生活指導を行う前提として、A 氏が最重要視するのは、生徒との間に信頼関係を築くことである。これまでの生徒の学校経験における教員像は、生徒を管理統率する近寄りがたい存在、つまり、生徒の方から好んで近づける存在として教員は位置付けられていないのではないかと A 氏は感じている。このような教師像を生徒がもっている限りは、生徒は学校や教師から距離を置き、そのことによって、生徒理解を阻み、その結果、授業実践や生徒指導がうまくいかないのではないかと考えるようになる。そこで、A 氏は、「教員だって、普通の人間だよ、って。・・・馬鹿な話もしているし、・・・そうゆうふうには生徒と一生懸命、話をして、堅い教員のイメージを壊す」ことをするのだという。このような姿勢を示しながら、A 氏が生徒と接してゆくと、生徒は、「この先生（今までの先生とは）ちょっと違っている」と関心を示すようになり、生徒の方から困り事や悩みについて相談できるようになるのではないかと A 氏は考えている。生徒にとって人間らしい教員とは、生徒にとって、身近な存在ということになるのだが、これはただ単に友達のような存在になるというわけではない。生徒と遊ぶ時は思いっきり遊ぶが、生徒が人として誤った行いをしたときには、毅然とした態度で臨み、叱る時はしっかり叱るというスタンスは崩さない。このようなけじめをつけつつ、生徒がこれまでの学校経験で抱えてきた近寄りがたい存在としての教師像から、人間らしい教師像へと転換させられる教員が北星余市高校の生徒には必要なのだと A 氏は考えている。

しかしながら、近年、生徒の実態が変化し、生徒との人間関係や信頼関係の構築のみでは解決できないことがある点も A 氏は指摘している。A 氏の担当教科は体育であるが、かつては、やんちゃな生徒が多く、座学には集中できないが、体育となると積極的に力を発揮でき授業は

盛り上がっていた。ところが、近年は、不登校経験者の入学の増加や、軽度発達障がいがある生徒が入学しており、集団で一つのことをすることに困難を抱えている生徒が入学してきている。このような生徒の状況の変化から体育の授業はかつてあったような活気が失われているとA氏は感じている。体育をさぼる生徒が多いので、教育上必要なことを指摘しながらも、練習より試合を多くして遊ばせる。また、体育の授業に参加するための要件（服装、欠席日数）を満たさない生徒もあり、きちんと守るように指導をしている。その他、体育の授業に出ている生徒の中にも大学受験の教科重視で体育の授業軽視する生徒の風潮もあり、このような状況をどのように改善してゆくかが今後の課題であるとA氏は捉えている。

進路の問題では、生徒指導に多くの時間が割かれており、高校3年間を通じて計画的に進路指導を行う必要性を感じている。かつては、高校資格を取得することが学業の最終目標であった生徒が入学してきたが、近年では、北星余市高校に入学した当初から、進学を希望しているものや、入学後に成績が上がり自信を付け、大学進学を目指そうと考える生徒もいる。北星余市高校に来る前は、点数を取れなかった生徒が、次第に成績が上がって、自信がついてきて、そこで、やっと大学で勉強したいと思うようになるが、その頃には、すでに3年生になっており、大学進学を目指し進路を決めても、受験指導をするには時間的に難しいとA氏はみている。

さらに、北星余市高校を卒業した後、進路先での生徒の状況も目配りをする必要性をA氏は感じている。A氏によると、「卒業生に『北星余市高校ダメだわ』っていう奴がいる。結局、北星余市高校は、甘やかしすぎっていうか居心地が良すぎる。それで社会に出たり、大学に行ったりすると、北星余市高校とは違う状況があり続けられない。高校では、休み時間や放課後に話を聞いてくれる学校の先生や相談できる寮の先輩がいるから、今まで学校に行っていなかった奴も少しずつ変わっていき、高校を卒業できた。卒業後は、学校の雰囲気と違う場所でも頑張れるやつは頑張れるけど、結局、話を聞いてくれる人がいなくなると、どうしたらいいのかわからなくなる。そういう奴が結局、高校を辞めた時と同じ事になってしまったり、もっとひどくなったりする」という現実がある。

北星余市高校は、これまでの学校歴で成功体験が少なく、居心地の悪さを感じ、高校中退や不登校を経験してきた生徒たちに対して、安心して誰もがいれる学校づくりを目指している。A氏の教育観に見られたように、人間らしい教員像を生徒が抱けるように心がけたり、生徒との関わりの時間を大切に、生徒との絆を強めることを重要視している教員がいることや、異年齢で構成された先輩や友達が身近にあり、日常の中で相談し合える生徒間の関係があることによって、生徒の登校が支えられていたのは確かであろう。しかし、卒業後、進路先で北星余市高校であった人間関係があるとは限らず、そのギャップに戸惑い、困った時にサポートが得られず、大学を中退したり、仕事を辞めたりしている人がいる。つまり、北星余市高校で得られた人間関係が卒業後の進路先で得られるとは限らず、卒業後の進路先で生徒が再びドロップアウトしてしまうという課題が残されている。

④保護者との関係作り―親同士の関係づくり・学校への信頼―

北星余市高校の教育を支える大きな力として保護者の存在があるとA氏は見ている。北星余市高校は転編入制度を導入してから全国各地から生徒が入学しており、全国各地にいる保護者が、学校行事があるたびに全国から北海道に集いその運営に協力してくれている。また、全国各地で開催される高校進学説明会にも保護者も参加し運営に協力しており、保護者のサポートが北星余市高校を支えている。特に、高校進学説明会では、保護者が自身の経験に基づいてこれから進学を考えている子どもをもつ保護者に北星余市高校を進学先として選んだ理由等を実体験に基づいて説明してくれる。保護者の説明は実体験に基づいている分、教員が説明するよりも非常に説得力があるとA氏は考えている。

北星余市高校の保護者が学校と協力的な関係を結べる理由を A 氏は、「子育てで同じ悩みを持つ親同士が北星余市高校に子どもを通わせることで出会い、自分ひとりが子育てに悩んでいたのではないと、安心し、励まし合う関係になり互いを信頼する関係になるのではないか。北星余市高校で子どもが成長してゆくのを目の当たりにして学校を信頼してくれ、学校に協力してくれているのではないか」とみている。

保護者からの学校へのサポートを生徒がどう感じているとみているのかは A 氏のインタビューからは聞きとりはできなかったが、保護者が学校に関心を示し、協力的であることは、生徒にとっても、親からの見守りを間接的に感じられ、励まされているのではないだろうか。

⑤学校運営—議論の場としての職員会議—

北星余市高校の教育を支えるものとして、学校運営を決める職員会議のあり方が特徴的である⁴。A 氏は、北星余市高校での職員会議を「とにかく長い、時には放課後から次の日の朝方で延々続く」と述べていた。職員会議が長くなるのは、単なる形式的な事務報告の場ではなく、教員それぞれが自分の考えを出し合う議論をする場となっているようだ。例えば、職員会議では、いじめの問題、停学処分の問題など主に生活指導に関わる議題がでるが、その一つ一つの問題について、教員の意見をぶつけ合うことになる。A 氏は、かつて薬物の問題があった時代の職員会議の様子を次のように回想している。「大麻問題に関係している生徒をすぐに退学にさせる」という意見に対して、「ただ問題を起こした生徒を退学させるだけで、そのあと、その子はどうなる？もっと悪くなるだろう。そうではなく、学校に残して悪いことは悪いと諭すべき」という意見がでる。そうすると、「生徒を単に学校に残す、退学させないというだけではだめだ。生徒を学校にとどめた後、医療、警察ともやり取りしながら、学校はしっかり対策を立てていかななくてはならない」など、一つの議題からそれに関係する新たな議題が次々と出されてゆき、ひとつひとつに議論してゆくと、結局、長時間になってしまうのだという。このような職員会議のスタイルは現在も継続している。A 氏は、「会議の時間が長いのは、学校のためだし、生徒のためだと思っている」と考えている。

このような A 氏の職員会議の在り方に対する考え方には、生徒が抱える教育課題を解決するために職員会議で長い時間をかけて議論できることに価値をおいていることが窺える。北星余市高校の職員会議は、決定事項の伝達に終始する硬直した雰囲気会議の場が支配されるのではなく、一見、冗長とも思われる意見にも一人一人の教員が耳を傾け、個々の教員の意見を出し合い指導の方向性を民主的に決めてゆけることに価値を置ける関係性が教員間にみられ、このような学校の風土が北星余市高校の教育を支えているのであろう。

⑥小括

インタビュー調査から、北星余市高校の教育の特徴とその課題を A 氏はどう見ているのかについてみてきた。北星余市高校の教育でも最も重視していることとして A 氏は、「うちの学校はずっと、人間関係を重視してきたから。社会にでるためにいろんなことを学んで、自信をつけていく、(学校は) そのためにいろんなことを経験してゆく場所、だと思う。」と述べている。

A 氏の発言にみられるように北星余市高校の教育の特徴は、人間らしく生徒との関係性を築き上げようとする教員の存在や異年齢で構成された友人や先輩が身近にあり、相談にのってくれることや、学校行事を通じて、多様な個性を持つ生徒同士が、ひとつの目標に向かって、お互いに協力してゆくということの重要性を学ぶ経験が得られること、他者から認められ自己に自信を見いだせる契機が得られること等にある。

これらのことによって、生徒たちが様々な生徒との関わり方を経験し学びながら、学校生活

⁴ 北星余市高校では「教員会議」と呼ばれているが、本稿では「職員会議」という言葉を用いる。

に前向きな姿勢を示せるように変化してゆく点に北星余市高校の教育の成果が見受けられる。しかしながら、卒業後の進路先で、北星余市高校で得られた先生や先輩、友人との人間関係が得られず、戸惑い、進学先や就職先をドロップアウトしてしまうという課題も残されていた。

（２）教員B氏のインタビューから

（担当：村松憲治）

①北星余市高校でのこれまでにについて

B氏は、教員歴15年の教師で、そのほとんどを北星余市高校で教鞭をとってきた。現在は、教頭であり生徒募集の入試委員長である。元々、中学の教員志望だったが、北星余市高校のテレビドキュメンタリーをみて、北星余市高校の教育に関心をもっていったところに、教員として学校にこないかという誘いがあった、赴任した。

北星余市高校に赴任した当初は、わからない事だらけで、初任当時は、生徒と同年輩ゆえに「なめられたり」した経験も多く苦労したが、周りの先生から助けてもらいながら乗り切った。しかし、担任を経験して以降、クラス運営で自分の考え方・方法が生徒たちにはまったく通用せず、裏目・後手が常態となり、クラス運営の面で苦労した。このような経験を通して、生徒理解の重要性を悟り、次年度から生活指導部を志願する等、北星余市高校の生徒を理解することに積極的に努めてきた。

B氏によると北星余市高校の職員体制では、校長職以外は、教員間に上下関係がないという。教員の役職関係なく、フラットに子ども達をみてゆこうという教員の認識がある。しかし、学校の現場は、教室での授業以外にも、来客者や電話の対応など教員には様々な仕事があり多忙化していた。そこで、教頭職を独立に設置し現在に至るが、B氏は3年程前から教頭や事務長をしている。

②行事・生徒会・生徒指導—人間関係の中で、自ら考えさせる方法での、社会的自立への途—

北星余市高校の生徒たちは、他の子ども達の未経験の体験（苦しみ・悩みなど）を多く持つ。非行・不登校を経験していたり発達障害を抱えていたり、しつけがされていない生徒、何がよくて何がダメなのか分からない生徒、生活自体が崩れている生徒がたくさんいる。このままでは社会で自立して生きていくことが困難な為、第一の目標は社会で自立する力をつけることである。また、それらは貴重な経験であり、世の中で生かす形にしたいと考えている。また、「そんな関係ない」「オレはオレなのだ」「どうせ生きていくのなんて一人だし」などと考えがちな生徒が多く、人間関係の中で適切なかわりを持てるようにさせたいと考えている。多くの生徒が抱えている困難は、この適切な人間関係の欠落にあり、この力を養っていく中で、自己肯定観や自治能力の形成もなされていくと考えている。

中でも、生徒会活動は「一緒にやるって意外に楽しい」「達成できた」「人ってまんざらでもない」等を感じさせるいい機会、行事をやれば生徒たちは団結する。普段はあまりしゃべらない生徒たちもしゃべるようになり相互理解が深まる。3年生になれば、お互いの良さ悪さを理解し尊重しながら、文句を言いながらもいいところを見つけつつ一つのものをつくり上げる。2・3年にもなれば、各人の得手不得手がわかりはじめてくるため分業できるようになり、仕切る生徒も出てくる。クラス討議も1年くらいでは不可能か揚げ足取りのような意見になってしまうことが多いが、3年くらいになると可能になる。B氏の認識では、1年と3年では先生と生徒の信頼関係が全然違う。そのため、担任持ち上がり制を採っている。この年代の生徒はやったらダメなことはわかっており、そのダメなことを「ダメだ」と互いに言えるようになることが3年間の変化である。

生徒たちに色々なことをやらせるが、このままいくとやばいというときには、疑問を投げかけるなどして別な方向に誘導する。入ってきたばかりの先生は細かく言ってしまうりするが

そのうち身につける。創設期の頃、3・4期あたりから14年目、15年目あたりの先生方の考え方、手法が未だに続いているという感じである。

生活指導部は一応、やってはいけないことをやってしまった時に、処罰する機関、謹慎処分を下す機関である。あくまでも「謹慎」で「停学」ではない。地元に返されたり、謹慎の館に入ったりするが、今までの生活や行動と向き合い振り返る大事な期間である。生徒が嘘をついた状態で謹慎処分にはさせない。「嘘を抱えたままでは、自分と向き合うことができない」と保護者にも説明し本当のことを言わせるように協力する。

生徒手帳はなく、校則はあるが生徒たちははじめほとんど分かっていない。昔は制服検査や持ち物検査もあったが、私服化もあり、「それ以外に力を注ぐことがある」と今は考えられている。処分の項目もその都度学んでいく仕組みをとっている。リスト化されていないのは大らか(ルーズ)などところがあるということと、リスト化すると柔軟性が欠けてしまうからである。

③授業実践・進路指導―「なぜ？」が湧く対話的な仕掛けづくり、選択授業。課題が多いが―

B氏の認識では現状としては課題だらけである。以前の北大との共同研究を終えて以降、生活指導に手一杯になってしまい、教科指導に目が向かなかった。未だに一斉授業ばかりで、子どもたちの理解が進んでいないにもかかわらず、授業は進んでしまう。特に、積み上げ型の数学・英語で顕著である。しかし、3、4年前から教科指導に目を向け始め、中学校レベルの学力はつけさせたいと考えている。それさえあればその後は、本人がその気になればいくらでも勉強していくことは可能である。「知る」ってすごい、「知る」って面白いと生徒が気づける授業、「なぜ？」という疑問が生徒から湧き上がる仕掛けづくりを授業の中でしたい。「勉強なんか面倒くさい」「英語なんて使わないし」という生徒に太刀打ちするのには、実際は難しいが。対話をしながら授業をすると生徒が以外にノッて来るという認識がある。

オールでは会話調のノッて行く授業が有効でスラングなども混ぜると食いつきがいい。一方、英文法ではプリントが中心である。プリントを提出させるが「しつけ」という観点もある。だが授業中ケータイをいじっている生徒を振り向かせられないことに悩む。教材は毎年変えなければと思っているが、完全に自転車操業状態でマイナーチェンジに終わってしまう。

やはり学力差はあり、一方では、一年間浪人はするものの早稲田や同志社に入る生徒もいる。札幌市内で中学校時代オール5を取っていて来る子もいる。大学受験する生徒は自分で受験勉強している。現状はそういったできる生徒の意欲を満たせておらず、またできない生徒を置き去りにしてしまっているのが、今年度から英語、数学で選択授業(初・中・上級)を取り入れ各学年横断的授業を始めた。まだ試行段階である。

④保護者と地域との関係―保護者の意識の変化等―

保護者の中には、自分の子どもが様々な問題を抱えており、そのことを入学する前は、他の親と相談できるような環境にはなくマイノリティで身を隠すように生活していた。北星余市高校に子どもを入学させたことにより、親同士は、同様の悩みを持っている親に出会い、一気に仲間ができて、お宅は、家は、と話ができる関係となり自然と仲が良くなる。利害関係抜きで、本音で話せる仲間ができたのがうれしかったという感想を多く聞いたとB氏は述べていた。

また、校舎の空き教室を利用して地域の人々の取り組みも期待される。地域の人が校舎を使い学習会を開いているが、そこに生徒たちも混ざって参加すると、人とのつながりも生まれるし、そればかりではなく、地域づくりの貢献にもなるとB氏は考えている。このように学校と地域の人々が結びつくことに対して、B氏は「子どもの育ちというのは一本のもののなので、専門分野がどうか何々教育と分けたりせずに、福祉的な側面を含めて、地域の学びの中心地でありたい」と考え、地域の人々とのつながりを大切にしたいと考えている。

⑤学校運営・その他―責任分担制と補い合いの構造―

北星余市高校創設期から、ずっと引き継がれている生徒指導観における暗黙の了解があり、各部署に責任が任されている。「担い手意識」という言葉があってそれぞれの向かい合っていることに意識を持って望む。そういった意識は自然と身について行くが、研修会も年間2回ずつ、綿々と50年も行っている。

職員会の議題は学校の運営に関する事、行事の方針や総括、生徒指導問題等で、生徒指導で生徒を学校に残すかどうかの場合、終了時間がよく伸びる。下宿に何日も置いて置けないためである。平行線の場合、挙手も行うがほぼ同数の場合さらに議論する。北星余市高校では、すべての議決は職員会議によることとされている。

学年団は、ほぼ毎日、担任部会という会議を生徒も帰ったあたりになって開き、「今日どういうことがあった」、「あいつまた今日も遅刻していたね」とか、「授業中寝ていたね」とか、些細なことから大きなことまで方向性を確認する。職員会議でも学年からの状況報告や意見交換をする時間帯が後半であり、気になる子とか抱えている問題、他の先生からも「誰々大丈夫か」とか意見を出す。

クラス内指導は担任に任されており担任は孤立しがちだが、知恵が出ない部分は担任団で補い合って、力量ない普通の人間だからみんなで支えあっているということで、精神的に悩んでいくことを防いでいる。

⑥小括

インタビュー記録から、北星余市高校の特徴とその課題についてB氏はどのように捉えているのかを見てきた。B氏は、一般教員の経験もあり、現在は教頭職や入試委員長として学校運営全体にも携わっているため、一般教員の立場と管理職の立場の両方の視点から北星余市高校の教育を捉えている。

北星余市高校の教育は、先人達が実践の中で練り上げてきたものが生かされているという認識がB氏にはある。それらの教育実践には、A氏も述べていた学校行事で人間関係づくりを生徒に経験させること、生徒会を中心とした学校行事の運営とその過程で自治能力を育成させる等があった。また、生徒指導では校則は、規律や規則を遵守させることに終始せず、自己の失敗にきちんと向き合うことができるようになることの方に教育の価値をおくなど北星余市高校ならではの教育観があり、これによって北星余市高校の教育実践は支えられていた。

また、教頭職にあるB氏は、学校運営と関係させながら北星余市高校の教育の特徴も述べていた。生徒指導を必要とする生徒の情報をインフォーマルな場で交換できるような教員間の関係性があり、そのような関係性がコミュニケーションを円滑させ、生徒の情報を教員間で日常的に共有できていることをB氏は挙げていた。これによって、教員が日々変化する生徒の状況に細やかに対応できる可能性を高めているのであろう。

北星余市高校の教育の課題としては、授業研究や教材研究をする時間を確保できず、授業の改善ができないということをB氏は述べていた。生徒間に学力差が大きくなるので、どのような学力の生徒でも、学習内容が理解できるように工夫したプリント教材を作成するが、生徒指導に多くの時間が割かれているため、教材研究をするための時間が取れずにいることをB氏は懸念していた。進学希望者が増加傾向にある近年、生徒指導やその対応と並行して、授業研究をするための時間や精神的余裕が確保できる学校の体制づくりが必要ではないだろうか。

(3) 教員C氏のインタビュー

(担当：宮井真由)

①北星余市高校でのこれまでにについて

C氏は、大学卒業後1988年に北星余市高校(以下、北星)に採用され、教員歴25年目となる48歳の校長職の男性教員である。採用されたのはちょうど北星が中退者受け入れを始めた

年であり、学校全体が新たな体制に変わり混乱する中、大学時代の教授の勧めでどのような学校か何も知らずに赴任する。赴任初日の入学式の時に、生徒会の生徒たちがリーゼントや長いスカート、靴のかかとを踏んだ姿で歓迎のあいさつをしたのが印象的だったという。初任時には誕生日が6カ月しか違わない二十歳を超えた生徒もいた。

赴任当初は古典の授業をしても生徒は誰も聞かず弁当を食べ私語をし、教室を出ていく、というような授業が成り立たない状況が続いた。北星で初任者は同様の事態に陥るようである。生徒が隣の教室に入り迷惑をかけるため、教室にとどめるためにいろいろな方法を試すことから始めたのだが、毎時間が生徒との「喧嘩」で「殺伐とした」状態は変わらず、「何のために教員をやっているのだろうか」と教室へ向かう足取りも重くなっていく。しかし2年目に担任となり、自分のクラスの子どもと毎日顔を合わせ、寮に訪ね、コミュニケーションの取り方が変わってくると子どもとの関係が変わり始める。個人的に話をし、「はねつけられようが何しようが」コミュニケーションを取り続ける中で「生の人間対人間の言葉のやりとりみたいな部分が一番大事」だと気づくと、関係が変わり授業も楽になったという。そうした経験からC氏は、生徒との関係性を重視する指導観を形成していく。

②行事・生徒会・生徒指導－関係性の再構築が成長につながる

このように、教育実践の根幹にまず生徒との関わり重視があるC氏が長い間大事にしてきたのは、「生徒よりしつこさ的なところでは上でなければいけない」ということである。生徒インタビューの中にもあるように、生徒には、これまでの学校経験の中で教師から指導をあきらめられ見捨てられるような思いをしてきたケースも多い。そのような思いを抱える生徒であっても担任として3年間「しつこく」つきあったら、「この人はこんな人か」と最終的には安心して心を開くという。

また、C氏は、生徒に「自分を助けられる人になってほしい」と願っている。世の中には嫌な人もいるが頼れる人もいると両方いるという感覚を持てるようになることが、将来的に他者と関係を結んでいく時にも重要であるとの認識であるが、裏返せばそのような認識を持てずに来た生徒たちの実態が背景にあるということでもある。

C氏が学校全体で重点を置いていると考えているのは、「(学校に) どの子も居られるということ」であり、「居られる」ということは自分の思ったことを言えて行動が起こせるということなので、強い者が強制的に従わせるような「暴力支配」の排除を常に意識してきたという。

北星では様々な取組がなされているが、B氏も語っている生徒会活動について、C氏はその意義を「一番は、面倒くさいことを大人数でやる仕組み」という。「まとまりようもない人と、一つのことをやるということと、それができたということの経験」こそが、自己や他者への理解を深める重要な体験となると考えるが、これは他の教員にも共通している。

学校行事以外にも、教員は自分の趣味や得意分野を生かして生徒と様々な関わりを作ろうとしており、釣りや登山、美術館や自宅でのバーベキューなどに生徒を誘い、珍しいスポーツ大会を見つけ出しては参加を呼びかけたりもする。このようなインフォーマルな関わりは、生徒にとって教師との関係だけでなく、生徒同士の関係構築のきっかけともなっている。担任だけでなく、担任外教員との関わりを含めた、教師集団との重層的な関わりが「しつこさ」(＝継続性)をもってなされるとき、生徒の中にようやく安心や信頼が生まれ、学校という場に居場所を見いだせるといえる。

このように、北星での対教員、あるいは生徒間関係は、生徒のこれまでの学校体験や他者との関係性を塗り替える体験となり、成長上の様々な課題を乗り越えさせるものとなっている。と同時に学校や人間集団(＝社会)への帰属意識を高めているということは評価すべき点であろう。しかしその一方で、卒業生のその後は安定的とは言えないことがわかり始め、この学校

の中で「居られ」だけでよいのか、社会に出ても生きていける力をつけていく必要があるのではないかと、ということが新たな課題として持ち上がってきたと C 氏はとらえている。

北星では、生徒が問題を起こした際の対応（処分）は罰ではなく振り返りを目的としている。「暴力支配の排除」を重視し、暴力行為についての処分は重いが、基本的に生徒一人ひとり個別の状況を理解した上で「振り返り」の必要性に応じた処分となっており、運用は流動的である。そのため、処分の運用について生徒側には不透明に感じられることもあるようだ。

③授業実践・進路指導－生徒の課題に応える授業カリキュラムの模索

北星では、生徒や教師インタビューに見られるような実態があり、その時々生徒の実態に応じてカリキュラムを変えてきた。その中の一つが「古典」をやめ「言語」という学校設定教科を設置したことである。C 氏には「古典」はあまりに生徒の現実とかけ離れていたように思われた。一方で、「すべての教科やいろんな先に、日本語をうまく操れないということが生活指導にもきつとつまずきとして出てくるだろうというのが感覚としてあり、「この子たちは何か道具さえ、道具やタイミングがあれば、たくさんあふれるものを持っているのだ。だけどそれを知らないから、何にも出せないし相変わらず勉強はわからないし、『俺アホやし』と思っている」という生徒理解があった。「言語」の授業では、自分を理解し表現する力をつけていくことを目的としており、漢字の学習から始め、最終的には 800 字の小論文を書くまで力をつけていく。生徒たちの成長する姿に、この教科は C 氏にとっても楽しみなものとなっていく。

その他、2013 年度からは選択制授業も始めている。北星では「できる子もできない子も」一緒に授業を共にして交流することを重視してきたため、これまで習熟度別学習は行わず一斉授業がメインであった。しかし、これまでの授業は学習上のつまずきに対し日常的にカバーする仕組みがなかったと C 氏は言う。そのため、わかる喜びを体験させたいと今年から選択授業を導入し、わかる喜びは生徒指導も変えていくとも考えているが、その「仕組み」についてはまだ模索中である。

進路指導について C 氏は課題を感じており、「人間づくり」はしてきたが、卒業直前になって「とりあえず」の対処にとどまって十分な「指導」を行えていなく、大学進学はしたものの学力的な問題もあり退学するケースもあったと語る。これまで北星では生徒自身も教師も卒業することを、第一に考えており、実際に 3 年生になっても謹慎処分を受けるケースもある等、生徒自身も落ち着かず教師側も生徒指導に労力をさかれるという実情があった。将来を切り開くために高校の役割として何が必要か、検討する上でも卒業後の状況をまずは知ろうと、卒業生へアンケートを行い、状況理解を始めている。

④保護者、地域との関係－保護者の変化、地域の視線

C 氏は近年保護者の価値観が変化していると感じている。例として携帯電話を 2 台から 3 台持つ生徒の多さを挙げ、子どもが消費主義に流されている現実に関してもストッパーになりえない状況を挙げる。かつては親と協力して教育活動を構築していくということが前提であったが、変化せざるを得ず、今は親が「できない」ことを前提に、どこまでできるのか見極めながら関わらなければならないとなっているという。ただ、北星の特徴として、世間で言われるような「モンスターペアレント」はほとんどいない。学校へ文句が来るのは学校のやり方に対してではなく、むしろ処分で自宅に戻す時であり、背景には交通費の負担や自宅で子どもをみることが困難な保護者の状況がある。しかし、処分は子どもが変わるきっかけとしてあることを伝え、そこで最終的に保護者には納得してもらうことになる。

一方で、数か月おきに会う生徒が変化している様子を実際に目にすることで保護者は学校を信頼するようになり、学校での様子を知りたいと足を運んでくれるようになり、そのことが行事等への協力に結び付いてきたと C 氏はいう。

地域との関わりについては、北星は、町内での生徒の問題行動もあって「怖い学校」として見られている。地域で生徒がゴミを捨てるため地域住民から苦情が寄せられることがあり、その時は教員たちでゴミ拾いを続けた所「先生方も大変ですね」と関係が改善したという例もあった。生徒たちが雪下ろしや施設訪問などのボランティア委員会の活動を町内で行うことによりイメージの改善が図られることもあるが、迷惑をかけられた、腹が立ったという方がより記憶に残るので、地域との関係は悩みである。

⑤学校運営・その他―北星独自の組織形態・高校の将来像

北星の教員組織であるが、役職付きの人事については独自の選出方法を取っている。校長は3年任期で教員の中から選挙で選ばれる。教頭職は対外的な対応の必要性から2012年に新設し、選挙で選ばれた総務委員の中から互選され、教員全体の信任投票で決定する。

日常的に機能しているのは学年部会であるが、毎日ここで教師たちは生徒について語り次の対策を練り、この場が生徒指導の要となっている。職員会議は学校全体として決めなければならないことを取り上げるが、事務連絡をして承認して終わりというものではなく、一つの議題についても様々な角度から、教師個人々の教育論まで踏み込みながら議論するため、夜の11時、12時になることもあり、明け方の3時まで議論したこともあるという。教育観の対立も生まれる。しかし時間はかかっても、そうしたプロセスが教育実践を支えており、「面倒くさいけど重要」だとC氏は考えている。

このように、北星の教師集団の特徴の一つは、ボトムアップによる組織の形成であり、組織形態についても学校経営の内容についても、決定には議論を通じて教員自身が主体的に関与することが保障されていることにある。前の年に挙げた議題が次の年にも挙がることのあるといい、流動性・可動性の高さがうかがわれるが、これは、時代とともに変化する生徒の現実に対し、微調整が可能になるということでもあり、教師集団としての対応の高さにつながっているのではないか。

一方、C氏は、教師集団の質的な変化が課題と捉えている。ある問題について教員個人が抱えるのではなく何となく全員が知っていることが大事だとC氏は考えているが、多忙と余裕のなさが教員同士のインフォーマルな交流を減らしているという。「時間じゃなくて心の余裕がない」といい、それは個々の生徒の抱える問題が「重い」からであり、生徒指導が困難になっていることと、ミスが許されないような風潮とが関連していると捉えている。余裕のなさは、C氏が大事にしてきた「しつこい」関わりを難しくし、そのことがまた教師を追い詰めるという悪循環になると見ている。

北星の未来についてC氏は、これまで学校は一つの世界であり卒業させることが第一目的であったが、これからは変わる必要性があると語る。背景には、入学時から福祉の支援を必要とする生徒の増加があり、そのことによって必然的に外部の福祉関連団体・組織との連携の実績が重ねられてきたという事実がある。例えば、「今までのシステムは、そこから外れた人は元あるところに戻すという単純なシステムなのですね、すべてが。」と、「高校」を中退した生徒が北星という「高校」に入学するシステムも、里親制度も、「とにかくダメだったところ（高校なら高校）に戻してやり直させるというシステム」と説明する。しかし、「ダメだったらこの子は何を求めているという生き方をしたらいいのだということを経験的にプロデュースじゃないけど、考えた上で、元の所に戻すのも一つの選択肢だけれども、いろんなところを経由させていく選択肢もあるのかなと気がついてきたのですよね。」と考えるようになる。そのために、生徒がどのような道を生きることができるか、年齢も状況も関係なく自分で選択しながらいつからでもやり直せるような仕組みを他機関とも協力しながら作り上げ、その一つが学校であるべき、と、やりなおしのシステムをプロデュースするという新たな学校像を展望する。

ただし、高校の教師として「その子たちが生きていくときに何らかの助けになるものを提供できる」ことが高校の原点だという思いは変わらない。

⑥小括

C氏へのインタビューを通して見えてきた北星高校の実践の特徴の一つは、教師が集団として生徒を受け止める機能の有用性である。北星に入学する生徒たちは、これまでの成育歴、学校歴の中で、個人あるいは社会環境的要因により、成長・発達に関する様々な課題を抱えているケースが多い。このような問題は教師や他者との関係性構築を阻害し、学ぶという行為を難しくもするが、そうした若者に必要なのは時に行動が逸脱しても関係を切られることがない、見捨てられないことがないという体験である。C氏のいう「しつこい」関わりは、生徒の側からは「見捨てられない」、「抱えられる」体験となり、自己の確立や自立を促すものとなる。また、生徒が関係を構築するのは担任だけではなく、関わりを持ちたい教師を様々な機会を通して自然な形で選ぶことができ、教師が集団として関わりと支援を保障しているところに、北星の実践の特徴があるといえる。

そして、C氏はインタビュー中「仕組み」という言葉を多用したのだが、校長の公選制、授業内での活動、生徒指導の方法、学力補償等、教師が意図的に行う「仕組んだ」活動は次元を問わず「仕組み」として語られた。ここからわかることは、C氏の言う北星の「仕組み」は教師の主体性・自発性により作られるものであり、作り変え可能な流動性の高いものであるということである。「仕組み」は、一般的な意味でのシステム、あるいは機能、制度と言い換えることもできるが、生徒の実態に応じた可動性の高さは小回りの利く実践を生み出しているのではないか。教師が意思を持ち表現できる個人として学校全体の運営に主体的に関与でき、組織的に尊重もされているという「仕組み」は、教師だけでなく生徒にも同様の機能を保障し得ているのではないだろうか。

最後にC氏の学力観について触れておくと、北星での能力形成において数値で表せるような学力については語られていない。どのような能力を持つことが生徒の卒業後に必要かという問いに対し、「給料なんかとても少なくともいいけど、生き生きと生きている場所があってもいい」、「生活はかつかつだけでも、この仲間の中で地域貢献をしているな、という仕事が自分に合っているのだという人がたくさんいてもいい」という言葉に表されるような大人像を語り、数値で表せる学力ではない能力の形成を示唆したのは印象的であった。

3. 北星余市高校の教育と課題に関する考察

(担当：横関理恵)

(1) 教員はいかにして北星余市高校の教育を創造しているのか

教員のインタビューでは、「学校行事・生徒会・生活指導」、「授業実践・進路指導」、「保護者と地域との関係」、「学校運営とその他」といった視点から、教員の教育活動について聞き取りを行った。教員インタビューからは、北星余市高校教育の特徴にかかわる事柄がいくつか見えてきた。それらは、学校行事や生徒会活動を通じて、人間関係作りを学び経験してゆくなかで、生徒たちが人との繋がり的重要性を実感できる教育実践が展開されてきたことや、その中で生徒は自己肯定観を育てていると教員がみていること、そして、このような教育実践を可能としているのは、管理職が公選制で選出され、役職に関係なく平等に物事をいえるといった教員の関係性に支えられた学校づくり、いわば、民主的な学校づくりに挑戦している様子が教員インタビューから伺えた。

教員インタビューから伺えた民主的な学校づくりは、北星余市高校の教育の根幹をなす「集団づくり」の実践と深く関係していると思われる。同校のホームページによると「集団づくり」の教育実践は、「クラス集団づくり」を基盤とし、その後、生徒会を中心とした学校行事を通

して「全校集団づくり」へと段階的に発展させてゆくものである。集団づくりの教育実践の前提として、同校が重視していることは「だれもが学校に安心していられる」学校づくりであり、学校内から暴力的な支配にかかわることを一切排除し、生徒間の対話によって物事を決めてゆくという「クラス民主主義」の思想が同校にはある。このような教育観を基軸として北星余市高校の教育実践は展開されているのである。(同校ホームページ『北星余市』の教育とは何か)を参照)。そして、「生徒を集団の中で育てる」という伝統的な北星余市高校の教育観は、現在も引き継がれており、「子供たちは集団の中でこそ成長する、さらに、社会で生きてゆく力は、集団の中で育つ」(同上)という教育観・発達観に基づいて、卒業後の社会で生きてゆく力を育成することを目指した教育実践を行っている。

そこで、本節では、教育インタビュー調査で見られた「民主的な学校づくり」や、上述した同校のホームページにある「クラス民主主義」などに価値を置く教員の教育観がどのようなものであり、そのような教育観は教育実践にどのように反映しているのか、また、そのような教育実践を支えている学校運営とはいかなるものか、そして、生徒の成長を教員はどのように捉えているのかについて考察してゆく。これらを通して、北星余市高校の教育実践の特徴を形成している諸要因について考えてみたい。

(2) 教員の教育観の転換

北星余市高校の生徒は、これまでの成育歴、学校歴の中で、個人あるいは社会環境的要因により、成長・発達に関する様々な課題を抱えていることが多い。時には、これらの問題によって教師や他者との関係性構築を阻害し、時には、逸脱行為につながり、学ぶという行為を難しくもする。このような課題を抱えている生徒に対して、北星余市高校の教員は、生徒の信頼関係を築くことを重要視していた。

生徒指導部を担当した経験のある A 氏は、生徒と関係性を構築する上で、まずは、生徒が抱く権威的教師像を壊すことから始めると語っていた。生徒と遊ぶ時は一緒に楽しみ、叱る時は言葉を尽くして叱るというけじめをつけつつ、生徒の話を一生懸命聞くアニキのような身近な人物、つまり、人間らしい教師になろうと心掛けていた。このような生徒との関わり方を通じて、生徒との距離を近いものとするにより、生徒との信頼関係が築きあげられると、生活指導に対して生徒が耳を次第に傾けられるようになりはじめ、生徒の方から教員に相談しようとするようになるという。つまり、逸脱行動や校則違反をした生徒を処罰することのみが生徒指導ではなく、日常的に生徒が教員に学校生活上、困っていることを相談できるような信頼関係を対生徒と築きあげることも含めて生徒指導と A 氏は考えていた。

このような生徒指導観は、対生徒との人間関係づくりにも反映されていた。生徒は、時に行動が逸脱することがあるが、教員たちは、生徒との関係を切らない、見捨てず、生徒を受け止める姿勢で臨んでいる。これまでの学校経験で「学校から見捨てられた」と感じる生徒は少なくなく、そのような経験をした生徒には「しつこい」かわり方、つまり、何があっても、どこまでも生徒にかかわり続けようとしてゆくことが生徒には必要なのだと教員は考えている(C 氏のインタビューより)。教員から「見捨てられない」、「抱えられる」という経験によって、生徒たちは、これまでの学校経験を塗り替えられ、安心して学校にいられるようになる。生徒を見捨てない「しつこい」関わりを重要視して生徒を受け止める教員の姿勢によって、過去の自分を見つめ直し、過去から現在へ、そして将来の自分を展望できる可能性を見出す手がかりを模索しながら、高校生活をやり直すことにつながっていると思われる。

しかし、ただ単に、生徒と友達のような関係になろうとしているのではない。いじめ行為、非行行為(校内暴力、煙草・飲酒・薬物)、人を傷つける言動に対して、常に教員はアンテナ

を張り巡らし、暴力支配につながる恐れのあるものは、毅然とした態度で接している（C氏のインタビュー記録より）。暴力支配に関わることをしていながら、生徒が嘘をついている場合、それを決して見逃さず、事実を生徒が述べるまで教員は生活指導をやめない。生徒が自己の過ちを認め、省察できるようになることが、生徒の変化や成長を導くものであると教員は考えているためである。教員は、生徒が過ちを犯した事実から目をそむけ、嘘をついていることを絶対に許さず、事実を話すまで教員は待つのである。（B氏のインタビュー記録より）。様々な困難を抱える生徒が直面する問題に対して、教員は、即座に厳しく生徒を叱りつけ、いわゆる、学校文化というものに適応するように厳格な処罰のみを課すのではなく、生活指導を要する子どもが抱える問題性を厳しく追及する態度を示しながら、生徒の間違った行いを一旦は許容し、生徒が正しい方向性を見いだせるようになるまで教員は寄り添うのであろう。A氏が「失敗を経験した生徒の方が早く成長するし、成長する度合も大きい。失敗していろんな人に諭されて生徒は成長し変わってゆく」と述べているように、生徒が成長の過程で失敗することを許しながら、生徒を丸ごと見てゆくといった点に北星余市高校の教員の寛容さを見出せるのである。

北星余市高校の教員は、生徒の暴力的行為や言動は絶対に許さないという「毅然とした態度」の側面と、生徒の間違いを許容し生徒自身がそれを省察できるよう長い目で関わりをもち生徒を諭すという「寛容」の側面をもっている。教員はこの二面性を使いわけてゆくことになるが、教員の対応の違いの真意を生徒に受け入れられるか否かは生徒と教員の信頼関係の有無に影響を受けるのだろう。

（３）人間関係を重視する教育実践と学校運営

生徒インタビューでは、生徒間の人間関係づくりを学ぶ経験は生徒の成長にとって大きな影響力を持つものであることが語られていた。とはいえ、北星余市高校の生徒たちは、成育歴は様々であり、異年齢で構成され、やんちゃ系の生徒や大人しい系の生徒が混在しており、ともすれば、このような生徒たちの間で、強いものが弱いものを抑圧してゆくという暴力的支配構造が生じるのではないかという懸念は拭いきれない⁵。このような懸念に対して、北星余市高校は、「生徒が誰でも安心して学校に入れるような生徒集団作り」（C氏）を重視し、対話によって集団作りを進めてゆく「クラス民主主義」という教育観に基づく教育実践に挑戦している。

北星余市高校のホームページによると、「クラス民主主義」とは、同校の教育の本質に「生徒は集団の中で育てる」と教育方針があり、「クラス集団づくり」、「全校集団づくり」の実践を展開しているのだが、その前提となる思想が「クラス民主主義」であるという。同校は、暴力支配やいじめに対する指導が、避けて通ることのできない重要なものと考えているため、常にいじめはもちろん、からかいや使い走り等にもアンテナを高くして、暴力支配的傾向に対処している（北星余市高校ホームページ『『北星余市』の教育とは何か』を参照）。つまり、だれもが安心していられる学校づくりの前提として、一切の暴力支配を排除する「クラス民主主義」

⁵ 生徒指導部会では、「持ち物検査、服装検査、頭髪検査をやるよりも、他にもっとやるべきことがある」と考えているそうである。この語りからは校則を遵守させることのみが生徒指導ではないという教員の考え方が窺える（B氏のインタビュー記録より）。

⁶ 北星余市高校のクラス分けは第1学年の時は中学調査書の成績・入試の得点、生徒の出身地、虞犯経験のある生徒は一つまとめるようにする。第2学年は1年生の成績、出身地、リーター的存在の生徒を各クラスに均等に分ける、生徒指導を必要とする生徒をクラスに均等に分ける、1年次でカップル担っている生徒同士は同じクラスにしない。このような配慮をしてクラス分けをしても、指導自体が困難になるクラスができることもある。その場合は、学年部会を開き、そのクラスの担任のみに負担が集中しないように、学年の担任が全員で対応する。学年をクラス分けはするが、学年担任はその学年を全員でみるという感覚が教員にある（2013年6月14日北星余市高校学校訪問・校長への質疑応答の記録より）。

という考え方が同校にはあり、この考え方に基づいて、クラス単位の集団づくりの教育実践がなされ、生徒会を中心とした学校行事による全校集団作りの教育実践へと展開されているのである。

クラス集団づくりでは、対話を重視するクラス討議によって物事を決めるであるが、最初はクラスで何か討議するといっても、意見を言っている生徒のあげあしをとることに終始するにとどまり、討論するということまではいかない（B氏インタビュー記録より）というのが生徒の現状であった。

このような状況に対して、国語教員であるC氏は対話による交渉ができないのは、言語運用能力の未熟さにあり、このことが、教科学習の弊害となるばかりではなく、生活指導を必要とする様々な躓きにも関係しているとC氏はみており、生徒たちが自分のことを表現できる道具、つまり、言語を獲得できるように「古典」の授業をやめて、「言語」の授業を導入していた。このことは、学校生活・学校行事に関わる全ての事を生徒間の対話によって物事を決めてゆくという「クラス民主主義」という教育観と関係していると思われる。それぞれの違った考えの生徒が、人々と関わりながら何かをする時に、暴力支配に訴えるのではなく、対話によって民主的に物事を決めてゆく。様々な考えの人と一つの目標に向かって協働する過程で、衝突や人間関係の不和が生じるところでも、自分の考えを聞き手に理解してもらうために「語れる力」が確かに必要であろう。

さらに、北星余市高校の教育観の特徴にみられた「クラス民主主義」や「暴力支配の排除」という考えは、教員の人間関係やそれに支えられる学校運営に関する教員のインタビューからも窺えた。特に、学校運営の議決機関となっている職員会議は、事務的な報告の機会ではなく、教員の議論の場として機能しているという点に、民主的な側面を見いだせる。職員会議では、学校運営に関わる事柄を取り扱うばかりではなく、いじめの問題、停学処分の問題など主に生活指導に関わる懸案も取り上げる。一つの議題からそれに関係する次々と新たな議題が挙げられる。時には教員同士の教育観の対立が生まれる。その結果、職員会議は長時間にわたる議論の場となるのだという。職員会議で前の年に挙げた議題が次の年にも挙がることもある。A氏は、「会議の時間が長いのは、学校のためだし、生徒のためだと思っている」と述べており、また、時間はかかっても、そうしたプロセスが教育実践を支えており、「面倒くさいけど重要」だとC氏は考えている。北星余市高校の職員会議が、形式的な報告と確認というような硬直した会議のスタイルではなく、教員が主体的に会議に参加し自分の意見を言い合う議論の場となっている。そのため、長時間になり、議題も前年度と同内容を再三議論し直すことが教員インタビューで語られていた。

これらは、一見すると冗長的議論が展開され、非効率的であるように思われる。しかし、社会の変容とともに変化する生徒の実態に適切に対応するためには、従来の対応ではうまくいかないことも多々あり、これまでの生徒対応に変更を迫られることがある。そのため、職員会議で前年度と同じ議題でもその都度、教員集団で話し合うことになるが、このような取り組みができるのは、時間的効率よりも、対話を優先させられる人間関係が教員集団の中にあるからであろう。そして、話し合いが長時間になろうともそれは生徒のためだと肯定的に捉えられる教育観が教員集団の中にあるからであろう。

このように人間関係作りを重視している教育観は、対生徒のみにとどまらず、教員集団の人間関係作りにも反映しており、複数の教員たちが、それぞれの教育観の衝突を重ねて、相互の教育観を理解しようとする姿勢が、自らの教育観を常に柔軟に捉えなおし、結果として北星余市高校の教育力を高めているという見方もある。

（４）生徒の成長の捉え方

教員のインタビュー調査で北星余市高校の教育の特徴にあげていたものに、「生徒は集団の中でこそ成長する」という教育観があり、これを軸に展開される教育実践「クラス集団づくり」から「学校集団づくり」があった。インタビューでは、このプロセスに重要な役割を果たしているのが、学校行事、生徒会活動であり、これらの活動を通じて生徒が成長してゆく様子が語られていた。

北星余市高校の学校行事には、1年生から3年生になるまで1年生研修会、競歩遠足、弁論大会、学校祭、修学旅行など数多く行事がある。「学校集団づくり」の中心には、「生徒会顧問」の教員が担当し、学校行事は「生徒会執行部」によって運営される。教員インタビューでは「学校集団づくり」の教育的意義について、それぞれの学校行事の意義について多くが語られていたが、その中で共通に述べられていることは、異学年間で生徒の交流が生まれ相互理解が深まること、生徒の自信が回復してゆくこと、学校づくりに関わろうとする自治意識が芽生えていることであった。例えば、B氏のインタビューでは生徒会執行部が運営する学校祭によって「クラス集団づくり」から「学校集団づくり」と発展させるプロセスの過程において異学年間で生徒の交流が生まれていることを指摘していた。学校祭の準備は、3年生から自発的に始められ、上級生の姿をみて1年生は学校祭りのイメージを膨らませてゆく。3年生になれば、生徒同士相互の良さも悪さも理解しお互いを尊重しつつ、文句を言いながらも他者のよいところを見つけ学校行事を成功させるようにリーダーシップを発揮する事ができるようになる。2年生は、各人の得手不得手が相互に初めて分業できるようになる（B氏）。また、学校行事や生徒会活動において、生徒同士が協働する「一番は、面倒くさいことを多人数でやる仕組み」（B氏・C氏のインタビュー）であると述べており、「まとまりようもない人と、一つのことをやるということと、それができたということの経験」こそが、自己や他者への理解を深める重要な体験となると考えるが、これはA氏の学校行事の意義の捉え方にも共通していた。

また、学校行事は、失われた自己への自信を回復させる契機を生徒にもたらすものであることも教員インタビューでは語られていた（A氏）。そして、生徒執行部やクラスのリーダー的存在の生徒は、学校行事の運営に関わることを通じて、北星余市高校に帰属意識を強め、自分の学校の行事に学校・クラスのために大変であっても学校行事の仕事をすることに意味を見いだせるようになり、自主的に学校運営に関わるようになるなどの生徒たちの学校運営の自治意識の芽生えていることが語られていた（B氏）。

学校行事をはじめとする北星余市高校の教育実践の特徴には、クラス「集団」、教育的意義が教員インタビューで語られていたが、ここでいう「集団」とは、生徒には様々な個性があるにもかかわらず、一つの「集団」という型に押し込め、画一化・統一化してゆくのではなく、それぞれの個性や得手不得手を尊重しながら、価値観の衝突がありつつも、様々な特徴のある複数の人々と協働してゆこうとする人間関係によって構成されている人の集まりのことをいう。そういった性質の集団の中で人間関係づくりを体験しながら、生徒間の相互扶助を重ねる機会を得て、他者から認められたり頼りにされたり、他者を頼りにできるという体験を通して、自己の肯定感を高め、積極的に学校生活や学校行事に参加できるよう生徒が変化している点に教員は、生徒の成長を見出しているのである。

（５）まとめ

本章でみてきたように、北星余市高校の教育は、異なる背景を持った多様な子ども一人ひとりを尊重しながら学校行事や生徒会活動などを通じて、集団の中で生徒たちが人間関係のとり結び方を体験し学ぶことに教育的価値をおくものであった。このような北星余市高校の教育を特徴づけている人間関係づくりの教育実践は、単に、生徒を学校に適応させるという表面的な

側面をのみを重視したり、もしくは、狭い意味での学力のみを評価するのではない。北星余市高校の教育実践は、人間関係の構築を学び合う過程で、生徒一人ひとりが今まで気づかなかった「自分」を発見し、次第に自己肯定感を高め、学習活動に参加できるようになりその過程で人間的発達を培うことに教育的価値を置くものであった。

以下では、このような北星余市高校の教育の創造を可能にしている要素を整理し、教員インタビューから見えてきた課題を確認することで本章のまとめとする。北星余市高校の教育の創造を可能にしている要素には、一つには、これまでの学校経験によって生徒のイメージの中に形成された権威的教師像を壊し、人間的教師像のモデルになろうとしている教師側の考え方がある。様々な課題を抱える生徒は時として逸脱行為を起こすこともあるが、「生徒を決して見捨てない」という寛容な考え方が教員にある一方で、暴力支配に関わる言動や行動に関しては毅然とした態度を貫く教員の姿勢があった。

第2に、人間関係づくりを重視した教育実践があった。教員のインタビューにみられたように生徒との人間関係づくりには、生徒を「抱える」という表現に表れていたように生徒そのものを丸ごと受け入れ、失敗をしても決して見捨てず「しつこく」関わり続けてゆくという教員のアプローチの仕方に特徴があった。不登校や高校中退など、これまでの学校生活において、身近な大人であるはずの教員から見捨てられてきた生徒にとっては、北星余市高校の教員の「しつこい」かかわり方をする教員との出会いに最初は戸惑うかもしれない。しかし、教員から見捨てられないという経験によって、生徒たちは成長発達の過程で必要とされる困難を乗り越えてゆける力を獲得できているのではないだろうか。

第3に教員による生徒の成長の捉え方が特徴的である。生徒の成長を数値ではかれる学力に依拠するのみならず、数値ではかれない人間性の変化に生徒の成長を見出していた。入学前の学校生活でネガティブな経験を積み重ねてきた生徒たちは、自己肯定感が低かったり、複数の人と関わり合うことに苦手意識があったり無関心であったりするが、北星余市高校に入学して、複数の異なる考え方の生徒と共に一つの目標に向かって、協働できるような人間関係を作ることができるようになったり、人との交わりの中で他者から認められ自己肯定感を育ててゆき、自ら積極的に行動を起こせるように生徒が変化してゆく点に成長を見出していた。

北星余市高校の教育を創造する諸要素には、前述してきた教員の教育観に基づく3つのことが教員のインタビュー調査からみえてきた。それらは、生徒の人間的自立や社会的参加に必要な自己肯定感を育てる学校行事や、人間関係づくりを生徒たちが経験し学べる教育実践が展開され、数値では測れない生徒の人間的成長を多方面から評価できる教員の柔軟な物の見方があり、それを支える教員同士の関係性や学校運営があった。

以上、教員インタビューにみられる北星余市高校の特徴を見てきた。教員インタビューから伺えた北星余市高校の教育の特徴は、学業成績や素行が高校教育を受けるにふさわしいか否かで生徒を選別する考え方、すなわち、適格者主義という考え方が依然として残っている我が国の高校教育と照らし合わせてみると、大きな違いがある。

依然として適格者主義の考え方が強く残っている高校教育では、様々な困難を抱える若者たちは、素行不良・学業不振などの評価を与えられ、そのために高校生活に居心地に悪さを感じさせ、高校を中退している。結果的に適格者主義に基づく高校教育では、すべての若者の高校教育を保障していることにはなっていない。それに対して、北星余市高校では、一度は、高校教育から離反し不登校・高校中退をした若者たちを再び高校教育に包摂し学び直しを可能にしている。その理由は、本調査の教員インタビューでみられたように「適切な人間関係作り」、「自己肯定感の涵養」、「クラス民主主義」、「暴力的支配の排除」といったことに教育的価値を置く民主的学校づくりを展開してきたことにある。一般的にこれらの教育的価値は、知識偏重主義

や成果主義に巻き込まれている高校では、自明のこととして見過されているように思われる。それゆえに、すべての子どもを高校教育に包摂しきれていないとも考えられるのである。

とはいえ、このような北星余市高校にも課題が残されている。それは、北星余市高校では高校卒業資格を取得したものの、高校卒業後の進路で生徒が再び躓いているという問題が生じていることである。このことは困難を抱える若者の学校から社会への移行の問題であり、高校だけで解決できる問題ではなく、卒業後の進路先の状況も含めて慎重に検討されるべきものであるが、それでも、不登校・高校中退者の学び直し保障している北星余市高校だからこそ、卒業後の進路選択の保障をいかにしてゆくのかも見据える必要があるだろう。困難を抱える若者の高校教育の保障とその後の進路の問題は、福祉・雇用を含め、他の専門機関と連携の中に、高校教育をどう位置づけてゆくのかをさらに検討する必要があると考えられる。

終章 北星余市高校の実践から考察する高校教育における学び

(担当：伊藤健治)

本稿では、不登校や高校中退を経験してきた若者たちに対して独自の教育実践を展開してきた北星余市高校の実態を明らかにすることを目的として、生徒と教員へのインタビュー調査を中心に、同校の教育実践が若者たちの学びや成長にとって、どのような意義を有しているのかを検討してきた。本調査は今後も継続して実施する予定であるが、最後に、これまでの調査から明らかになった同校の教育実践上の特徴を踏まえ、様々な困難を抱える若者に対して高校教育が保障すべき学びとはどのようなものかについて、仮説的な考察を述べて中間報告のまとめとする。

北星余市高校の教育実践では、教員は民主的な関係づくりに教育的価値を置いており、高校中退・不登校などのネガティブな学校経験を持った生徒たちは、北星余市高校での様々な人間関係を基盤とした豊かな経験を通して、自己の自信を回復させ、高校生活を充実したものとしてやり直すことが可能となっていた。

第2章での生徒インタビューの考察では、様々な困難を抱えて北星余市高校に入学してきた生徒たちの学びと成長において、豊かな人間関係を通じた「自己の見つめ直し」が契機となっていると考えた。豊かな人間関係とは、クラス、下宿・寮、生徒会や部活など様々な集団にゆるやかに所属することによって形成された重層的なネットワークであり、こうした関係性を構築する上での不可欠な基盤が安定した生活環境であった。生徒自身の語りでは人間関係という側面が強調されていたが、その背景にある安定した生活、つまり、教員に対する信頼に基づいた安定した学校生活と、複雑な家庭環境や過去の人間関係から距離を置くことができる安定した日常生活は、「自己の見つめ直し」を可能とするための前提条件になっていると考えられる。

一方で、第3章の教員インタビューでは、人間関係づくりを重視した教育実践と学校運営が北星余市高校の特徴としてみられた。つまり、生活指導を中心とした北星余市の教育実践においては、暴力的な支配を許さないという「毅然とした態度」と、多様な生徒たちをありのままに受け止めるという「寛容さ」によって、すべての生徒にとって学校を安定した居場所にすることが目指されていた。そして、教員自身の教育観の転換を伴うような生徒との関係づくりを中心として、狭義の学力では測ることができない生徒の成長を見据えた教育実践が展開されていることが調査を通して明らかになった。

生徒と教員インタビューを通して考察してきたように、北星余市高校の生徒たちは、学校生活において「見捨てられない」ことを長い時間をかけて実感することによって、そこでの豊かな人間関係を紡いでいくことが可能となっているのである。つまり、教員による教育実践に基

礎付けられた人間関係の構築と、他者との関係性を通した「自己の見つめ直し」こそが、北星余市高校としての教育的意義を特徴付けるものであると考えられる。

最後に、北星余市高校での学びのあり方について、北大高校中退調査チーム（2011）において指摘してきた高校教育の課題と重ね合わせて考察してみたい。この調査は、中退にいたるプロセスと中退後の進路や生活の状況について、60名程度の中退経験を持つ若者に対して聞き取り調査をしたものである。そこでは、高校教育の課題として、中退者の多くが学校に通い続ける目的を見出すことができていなかったことを指摘した。彼／彼女たちの多くは、小中学校から学びへの関心が持てないまま低学力にとどまり、学力を中心とした学校的価値観において疎外されてきたと考えられる。この調査において、自己の中退経験をふり返って「中退して良かった」と肯定的に語る若者が何人もいたが、その背景には、中退した高校における学校経験の貧しさがあり、中退して初めて既存の学力的価値では計れない豊かな経験ができたことを示している。このような状況は、学校の在り方や教育内容に対して疑問を投げかけるものであった。

また、乾（2014）が中退後に学校に戻った者の自己意識が就労者よりも低い点を指摘しているように、北大の中退調査からも、中退後に多くの若者が何らかの形で高校卒業資格を取得する一方で、そうした学び直しを実現した若者において自己意識の面では必ずしも中退経験を乗り越えられていない様子が見られた。つまり、学び直しにおいては、高卒資格の取得や狭義の学力保障では計れない、学校生活における豊かな経験が重要な意義を持つのだと考えられる。

こうした高校教育の現状に対して、北星余市高校の教育実践は、異なる学びの姿を示すものであると言えるだろう。つまり、北星余市高校では、生徒たちは高校卒業を目標としながらも、学校生活における他者との人間的に関わりを通して自己を見つめ直し、過去の否定的な経験を乗り越えていくという意味において、高校での学びを実感しているのである。また、このような他者との関係を通した自己の再定位を人間的な成長・発達として理解する上で参考になるのが、折出（2003）が提起しているアザーリングの概念である。折出によるアザーリングとは、ヘーゲルの弁証法に由来するもので、自己が異なる存在としての他者との関係性を通して自己自身の有意味な変化、つまり成長を遂げるプロセスを説明する概念である。それは、困難を抱えた若者にとって、他者との関わりによる矛盾、葛藤を通して否定的な自己意識を対象化し、否定の中から肯定的な側面を見つけ出していくことによって成長していく様子として理解することができる。

困難を抱えた若者への支援を考える上で、安心できる居場所を用意することは重要である。しかしながら、それまでの自己の否定的な意識を対象化するためには、同質的な集団の中で安心していられるだけではなく、異質性を持つ他者との関わりによる矛盾、葛藤の契機が重要になるのではないと思われる。それは、前提として安定した生活があってこそ可能となるものであり、そうした学びの過程は長い時間を必要とするものである。しかしながら、時間をかけて、そうした自己の変容をもたらす関係性を構築することによって、その先の進路形成や社会への移行へと繋がる学びが成立するのだと考えられる。

ただし、本調査では北星余市高校の実践において、学力保障や進路形成などが課題となっていることが明らかになったため、今後の調査では卒業後の状況も視野に入れて検討を進めていく必要がある。また、不登校や高校中退を経験した者が抱える困難の背景や生活状況が多様であることを考えると、すべての者にとって北星余市高校の実践が必要であるとは言えないだろう。しかしながら、こうした教育実践の実態を明らかにすることで、過去の学校経験で否定的な自己意識を形成してきた若者に対して高校教育だからこそ保障できる学びの姿を見いだすことが出来るのではないだろうか。

本調査における仮説的な結論として、多様な若者の学びを保障する高校教育とは、社会への移行過程において、手段としての高卒資格取得や狭義の学力保障だけではなく、否定的な自己意識の変容を伴うような人間的な成長・発達を保障するものでなければならないという点を指摘しておきたい。そのためには、安定的な生活環境と多様性を認め合う寛容な学校生活を基盤として、豊かな人間関係の中での矛盾や葛藤を契機とした成長を経験していくことが重要な役割を持っていると考えられる。

【参考文献】

- ・青砥恭（2009）『ドキュメント高校中退——いま、貧困がうまれる場所』筑摩書房
- ・乾彰夫（2014）「高校中退調査から見えてきたもの」小池由美子編著『新しい高校教育をつくる—高校生のためにできること』新日本出版社
- ・折出健二（2003）『市民社会の教育』創風社
- ・清田夏代・黒崎勲（2001）「高校中退問題の動態と変容—明るい中退論批判」『教育学年報 8 子ども問題』世織書房
- ・北大高校中退調査チーム（2011）「高校中退の軌跡と構造（中間報告）—北海道都市部における 32 ケースの分析」『公教育システム研究』第 10 号
- ・内閣府（2011）「若者の意識に関する調査（高等学校中途退学者の意識に関する調査）報告書」（資料版・解説版）
- ・北星学園百年史刊行委員会編（1990）『北星学園百年史 通史篇』
- ・北星学園余市高等学校編（1975）『新しい学園づくりをめざして ある私立高校 10 年のあゆみ』
- ・北星学園余市高等学校編（1984）『授業でつづる』あゆみ出版
- ・北星学園余市高等学校編（1987）『北の大地に灯かかげて 北星余市高校の 20 年』
- ・北星学園余市高等学校編（1997）『学校の挑戦 高校中退・不登校生を全国から受け入れたこの 10 年』教育史料出版会
- ・北星学園余市高等学校編（2003）『続 やりなおさないか君らしさのままで ひとりで悩むな！ 卒業生・父母・教師からのメッセージ』教育史料出版会
- ・北星学園余市高等学校生徒編（2007）『しょげてんな！！ ひとりで悩む君へ 「北星余市」から 15 人のエール』教育史料出版会

〔付記〕本調査の実施にあたって、北星学園余市高等学校の皆様には快くインタビューや資料提供に応じていただきました。ここに記して厚くお礼申し上げます。

※本調査は、2013 年北海道大学教育学部授業「教育行政調査実習」として実施したものである。調査には、横井敏郎（北海道大学教育学部教授）を代表者として、伊藤健治・横関理恵（同教育学院博士課程）、宮井真由・村松憲治・倉田桃子・劉程程（同修士課程 2 年）、高嶋真之（同修士課程 1 年）、近藤なつみ・謝苗子・富浦麻穂・小林大造（同教育学部 3 年）が参加した。